慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	珍禽異獣奇魚の古記録
Sub Title	Old records of uncommon animals in Japan
Author	磯野, 直秀(Isono, Naohide)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2005
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 自然科学 No.37 (2005.) ,p.33- 59
JaLC DOI	
Abstract	動植物の記載で年記や地域が明確な事例は，過去の環境や人々の関心のあり方を知る手掛かりとなる。そこで先に動物についての略年表「幕末までの珍鳥奇魚捕獲記録」を本誌に載せ，ペリカン，オオサンショウウオ，マンボウ，リュウグウノツカイなどの捕獲・観察記録をまとめた（磯野2002，第９節）。しかし，漏れた事例もあり，また新資料の調査などで記録が増えたので，事項を大幅に増した年表を作成した。今回は，現在必ずしも珍品ではないが，当時の人々には馴染みの薄かったヨウジウオやコバンザメなども加えた。逆に，当時はありふれていたが，今は姿を消したトキやコウノトリなど現代人にとって珍しい動物も取り上げた。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10079809-20050000-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Hiyoshi Review of Natural Science
Keio University No. 37, 33-59（2005）

珍禽異獣奇魚の古記録

磯　野　直　秀

Old Records of Uncommon Animals in Japan

Naohide Isono

動植物の記載で年記や地域が明確な事例は，過去の環境や人々の関心のあり方を知る手掛かりとなる。そこで先に動物についての略年表「幕末までの珍鳥奇魚捕獲記録」を本誌に載せ，ペリカン，オオサンショウウオ，マンボウ，リュウグウノツカイなどの捕獲・観察記録をまとめた（磯野2002，第９節）。しかし，漏れた事例もあり，また新資料の調査などで記録が増えたので，事項を大幅に増した年表を作成した。今回は，現在必ずしも珍品ではないが，当時の人々には馴染みの薄かったヨウジウオやコバンザメなども加えた。逆に，当時はありふれていたが，今は姿を消したトキやコウノトリなど現代人にとって珍しい動物も取り上げた。

凡例

1　この年表には，慶応４年（明治元年，1868）までの記録を採録した。アザラシ・アシカ・ウミガメ・クジラなど，記録が多出する動物では一部だけを年表に採用した。
2　捕獲・観察年が特定できない事例，蘭船・唐船などで持ち込まれた動物，白亀・双頭蛇・四足鶏などの変異体は，原則として除いた。
3　狩野常信や毛利梅園の写生は捕獲地や捕獲日時が不明だが，多くの場合，捕獲地は江戸周辺，捕獲から間もない写生と思われるので，写生年月日の個所に置いた。享保元文産物絵図帳の記載などもこれに準じて扱った。
4　種名まで同定できない場合は，アザラシ，ウミガメ，クジラなど，総名を記した。
5　長さの単位，間・丈・尋などは原記載どおりとした。
6　表中の人名の解説，動物のグループ別にまとめた各論を付し，文献は稿末に一括した。

〒232-0066 横浜市南区六ツ川 3-76-3-D210，慶應義塾大学名誉教授。(76-3-D210，3-chome, Mutsukawa, Minami-ku, Yokohama 232-0066, Japan; Professor Emeritus, Keio Univ.) [Received Sept. 10, 2004]

年月日（○は閏月）	現和名	記事・出典（数字は巻番号）
推古27年（619）　４月４日	オオサンショウウオ？	近江国蒲生川で，人のような形のものを得る（日本書紀）
推古27年（619）　７月	オオサンショウウオ？	摂津国の堀江で，赤子のようで，魚でもなく人でもないものを網で得る（日本書紀）
斉明４年（658）	ハリセンボン	出雲国が，フグほどの大きさ，雀のような口で，鱗が針のような魚が多く死んだと報告（日本書紀）
延暦16年（797）　８月16日	オオサンショウウオ	平安京の宮殿の側溝で魚を得る。長一尺六寸で，形は常の魚と異なる。ある人は椒魚という（日本紀略）
弘仁４年（813）　４月９日	アカショウビン	右衛門府が，カワセミに似て真赤な鳥を献上（日本紀略）
仁寿２年（852）　３月７日	オオサンショウウオ	近江国で奇魚を得る，古老はみな椒魚という（文徳実録）
貞観12年（870）　２月29日	タイマイ？	佐渡から「鳥觜・赤甲」の奇亀を献上（三代実録）
仁和４年（888）　７月５日	アカショウビン	中務省が，赤黒く，鳩ほどの大きさの鳥を捕える。ある人は乞水鳥かという（日本紀略）
永享２年（1430）⑪月28日	ペリカン	舟津の漁師が，全身白く，嘴の下にウタ袋のある大鳥を京都に持参する（看聞御記）
天文14年（1545）３月20日	ウミガメ	小田原浦の砂地に上った大亀を捕えるが，のちに海へ戻す（北条五代記）
天正２年（1574）５月28日	ヒゴイ（緋鯉）？	琵琶湖竹生島辺で２尺５寸の金魚を捕える（随観写真・魚部：朝鮮鯉の項）
慶長12年（1607）６月	ウトウ	宇都宮藩主奥平家綱，塩漬けのウトウを父に贈る（当代記）
慶長19年（1614）４月５日	オサガメ？	駿河の浜辺で得た「背黒くして亀甲の如く，首は犬に似て尾三股」の魚を江戸城へ運ぶ（徳川実紀）
元和１年（1615）11月	ラッコ	松前藩主松前慶広，将軍秀忠に長７尺のラッコの毛皮を献上する（寛政重修諸家譜154）
寛永16年（1639）２月	トキ	加賀藩が近江から100羽を取り寄せて，越中砺波郡に放つ（南部2000）➡1790年項
寛永19年（1642）５月14日	クビワオオコウモリ	将軍家光が紀伊藩の世子徳川光貞に琉球八重山蝙蝠を下賜（徳川実紀）
正保３年（1646）２月４日	マンボウ	深川の漁師が「万歳楽」という長１間２尺の魚を捕え，江戸城に献上，５日に家光が上覧（徳川実紀）
正保４年（1647）４月２日	アカマンボウ	房州の漁師が「魴魚に似て長４尺・幅２尺３寸の赤い魚」を江戸城に献上（徳川実紀）
正保４年（1647）４月３日	アシカ	葛西の漁師が江戸城に献上（徳川実紀）
慶安２年（1649）２月12日	オットセイ[1]	釜石浦より１頭，盛岡に届く（盛岡藩雑書）
慶安３年（1650）12月14日	オットセイ	八戸白金浜より１頭，盛岡に届く（盛岡藩雑書）
慶安３年（1650）12月22日	オットセイ	八戸白金浜より１頭，盛岡に届く（盛岡藩雑書）
慶安４年（1651）10月26日	オットセイ	八戸白金浜より１頭，盛岡に届く（盛岡藩雑書）
慶安４年（1651）11月11日	オットセイ	閉伊山田浦より１頭，盛岡に届く（盛岡藩雑書）
慶安４年（1651）11月17日	オットセイ	八戸小船渡より１頭，盛岡に届く（盛岡藩雑書）
慶安４年（1651）11月26日	オットセイ	八戸白金浜より１頭，盛岡に届く（盛岡藩雑書）
慶安４年（1651）12月９日	オットセイ	八戸白金浜より１頭，盛岡に届く（盛岡藩雑書）
慶安４年（1651）12月10日	オットセイ	北閉伊金浜浦より１頭，盛岡に届く（盛岡藩雑書）
承応３年（1654）９月５日	ペリカン	盛岡藩の郡山（盛岡の南西方）で撃ち落す。のち，江戸へ送る（盛岡藩雑書）
明暦２年（1656）	ジャコウネズミ	ジャガタラから長崎に侵入，定着（長崎年暦両面鏡）
寛文２年（1662）７月９日	アネハヅル	紀伊藩主より幕府に献上（承寛襍録，錦窠禽譜・続８）
寛文４年（1664）11月13日	ウミガメ	大坂の浜辺に上がる，長４尺７寸（摂陽奇観）
寛文５年（1665）12月10日	イワヒバリ	狩野常信が写生（鳥写生図巻）

寛文６年（1666）２月27日	ウトウ	陸奥湾に面する外ノ浜で捕獲（錦窠禽譜・続10）
寛文６年（1666）５月３日	ウトウ	狩野常信が写生（鳥写生図巻）：蝦夷人の献上品
寛文６年（1666）10月３日	シジュウカラガン	狩野常信が写生（鳥写生図巻）
寛文７年（1667）２月７日	ソデグロヅル	狩野探幽が翼などを写生（探幽縮図）[2]
寛文７年（1667）３月16日	ウトウ	弘前藩主津軽信政が献上（徳川実紀），同月25日に狩野常信が写生（鳥写生図巻）
寛文９年（1669）６月17日	トキ	八戸藩，水田を荒らすトキを撃たせる。元文２年（1737）６月14日にも駆除を許している（トキの文献66・67）
寛文９年（1669）７月15日	ノガン	狩野常信が剥製？を写生（鳥写生図巻）
寛文11年（1671）６月24日	ヤツガシラ	狩野常信が写生（鳥写生図巻）：松平出羽守の献上品
延宝１年（1673）７月20日	ツクシガモ	狩野常信が写生（鳥写生図巻）
延宝１年（1673）11月20日	アリスイ	狩野常信が写生（鳥写生図巻）
延宝３年（1675）６月19日	オガサワラオオコウモリ，ハシブトゴイ，セイケイ類，アカガシラカラスバト，オガサワラカラスバト，オガサワラマシコ，メグロ	幕府の探険隊が無人島（小笠原諸島）で発見，ハト以外の鳥を持ち帰る（通航一覧附録12，磯野1997，鈴木2002・2003・2004）[3]
延宝３年（1675）７月13日	メグロ	狩野常信が上項の持ち帰り個体を写生（鳥写生図巻）[4]
延宝４年（1676）10月20日	ヨタカ	狩野常信が写生（鳥写生図巻）
延宝５年（1677）12月14日	キバシリ	狩野常信が写生（鳥写生図巻）
延宝７年（1679）４月16日	マツカサウオ	狩野常信が写生（草花魚貝虫類写生図28）
延宝７年（1679）５月９日	イトヒキアジ	狩野常信が写生（草花魚貝虫類写生図28）
延宝７年（1679）５月９日	ウミスズメ（魚）	狩野常信が写生（草花魚貝虫類写生図28）
延宝７年（1679）12月17日	オニカッコウ	狩野常信が死鳥を写生（鳥写生図巻）
天和１年（1681）４月８日	ブッポウソウ	狩野常信が写生（鳥写生図巻）
天和１年（1681）９月11日	ペリカン	花巻の町民が豊沢川で得て，盛岡藩に献上（盛岡藩雑書）
天和２年（1682）６月14日	シマゴマ（鳥）	狩野常信が写生（鳥写生図巻）
天和３年（1683）	オオサンショウウオ	天和年間（1681～本年），武州の牛込高田川で捕獲する，長３尺（日東魚譜）
元禄１年（1688）秋	シマフクロウ	松前藩主松前矩広が水戸藩主徳川光圀に，丹頂２羽・島梟１羽などを贈る（快風丸渉海紀事，佐藤1978）
元禄４年（1691）６月12日	アカグツ（魚）	狩野常信が写生（草花魚貝虫類写生図28）
元禄４年（1691）９月６日	ヤイロチョウ	狩野常信が写生（鳥写生図巻）：渡り鳥か輸入品か不明
元禄10年（1697）４月９日	マンボウ	備前国児島郡胸上村で捕獲し，岡山へ移送して人々が見物，長５尺（備陽記）
元禄11年（1698）６月27日	ダイオウイカ	房州勝山で長８尺のイカを捕獲（改正甘露叢）
宝永１年（1704）６月	レンカク（鳥）	駿河国浅畑で捕獲（博物舘禽譜，百品考三下）
宝永６年（1709）４月６日	マンボウ	摂津国大石村で捕獲（魚鳥写生図）
宝永６年（1709）８月20日	ブッポウソウ	狩野常信が写生（鳥写生図巻）
宝永７年（1710）⑧月11日	アマツバメ	狩野常信が写生（鳥写生図巻）
正徳２年（1712）１月13日	ウミテング（魚）	狩野常信が八丈島産乾品を写生（草花魚貝虫類写生図29）
正徳２年（1712）３月５日	アシカ	備前国邑久郡福谷村（岡山の東）で撃ち取る（備陽記）
正徳４年（1714）３月27日	マンボウ	紀伊出嶋（和歌川河口）で捕獲，長８尺４寸（九淵遺珠）
享保１年（1716）冬	ペリカン	堺の今地に２羽が飛来，１羽を捕える（月堂見聞集）
享保１年（1716）	マンボウ	房州で捕獲，見世物とする，長３尺（随観写真・魚部）
享保２年（1717）	チョウザメ	松前藩主が将軍吉宗の命で献上（松前志）

享保４年（1719）２月11日	トキ	将軍吉宗，東葛西での鷹狩で１羽を得る（徳川実紀）
享保６年（1721）４月４日	ヘラサギ	出府した松岡玄達が上野不忍池で数羽を見る（東遊日記）
享保６年（1721）４月30日	ウトウ	弘前藩，幕府の求めで生鳥３羽を献上（弘前市史）
享保８年（1723）５月22日	マンボウ	備前国児島郡北浦村で捕獲，岡山へ移送（備陽記）
享保９年（1724）２月10日	マンボウ	土佐十市沖で捕獲（魚鳥写生図）
享保９年（1724）９月	ウミガメ	房州の漁師が捕える（随観写真・介部）
享保９年（1724）	トキ	広島藩家老が他領から取り寄せて放つ（トキの文献1193）
享保10年（1725）１月３日	クジラ	堺・戎島の沖に現われ，13日に姿を消す（摂陽奇観）
享保10年（1725）10月１日	ペリカン	常陸国土浦で捕獲，幕府に献上（享保世話）
享保10年（1725）12月６日	タコブネ（フネダコ）	弘前藩，幕府の命により青森で捕えた身付きの品を塩漬にして差し出す（九淵遺珠）
享保12年（1727）３月	マンボウ	安芸広島の海で長５尺の大魚，沖万歳を得る（皇代系譜）
享保14年（1729）12月10日	シマフクロウ	松前藩主が幕府へ２羽献上（松前年々記，堀田禽譜）
享保14年（1729）12月13日	ヘラサギ？	将軍吉宗，瀬崎での鷹狩で「へら」を得る（徳川実紀）
享保15年（1730）春	ダイオウイカ	相州江ノ島で長９尺のイカを捕獲（諸国里人談）
享保15年（1730）	トクビレ	トクヒレの名で乾品を図示（佐州図上）
享保16年（1731）９月	ペリカン	松前の馬口石で捕獲（松前志）
享保17年（1732）４月５日	マンボウ	伊勢国桑名地蔵沖で捕獲（魚鳥写生図）
享保17年（1732）５月22日	アカマンボウ	房州沖で捕獲し江戸に運ぶ，長４尺７寸（随観写真･魚部）
享保19年（1734）２月20日	クジラ	下総国行徳で長７間と５間の鯨２頭を捕え，３月初めから江戸両国で見せる。江戸初の鯨の見世物（月堂見聞集）
享保19年（1734）９月５日	ライチョウ	加賀藩，幕府の命により立山・白山に登山して実写した立山雷鳥・白山雷鳥の図を差し出す（九淵遺珠）
享保19年（1734）	オサガメ	越前国三国の漁師が得る，甲長５尺（九淵遺珠）(5)
享保20年（1735）２月11日	アシカ	対馬国与良郷横浦で撃ちとる（小松1991）
元文１年（1736）11月	ヨタカ	『備前国備中国産物絵図帳』の「かくひ鳥」図：以下，元文３年までの記事は享保元文全国産物調査による(6)
元文１年（1736）11月	ヨウジウオ	『備前国備中国産物絵図帳』の「針魚」図
元文１年（1736）11月	スナメリ	『備前国備中国産物絵図帳』の「なめ魚」図
元文１年（1736）11月	クダヤガラ	『備前国備中国産物絵図帳』の「もうすし」図
元文２年（1737）９月	マツカサウオ	『大隅国産物絵図帳・春夏』の「か○そく魚」図
元文２年（1737）９月	アマサギ	『日向国産物絵図帳・春夏』の「うし鷺」図
元文２年（1737）９月	ヒウチダイ	『薩摩国産物絵図帳・春夏』の「ひうち」図
元文２年（1737）９月	セミホウボウ	『薩摩国産物絵図帳・春夏』の「せび」図
元文２年（1737）９月	オオセ（鮫）	『薩摩国産物絵図帳・春夏』の「おにうつ」図
元文２年（1737）９月	アカヒゲ（鳥）	『薩摩国産物絵図帳・春夏』の「あかひげ」図
元文２年（1737）９月	ハブ	『薩摩国産物絵図帳・春夏』の「はぶ」図
元文２年（1737）10月	ダイナンウミヘビ	『長門国産物之内絵形』の「ヒタカ」図：魚類
元文２年（1737）10月	コバンザメ	『長門国産物之内絵形』の「フナイトリ」図
元文２年（1737）10月	ヌタウナギ	『長門国産物之内絵形』の「スボ」図
元文２年（1737）11月	ギンザメ	『盛岡領産物絵図帳』の「にわ鳥魚」図
元文２年（1737）11月	ソコダラ類	『盛岡領産物絵図帳』の「ついさび魚」図
元文２年（1737）11月	ヨタカ	『盛岡領産物絵図帳』の「しびたたき」図
元文２年（1737）11月	カワガラス	『盛岡領産物絵図帳』の「びんくし」図
元文２年（1737）11月	スナメリ	『安芸国産物絵図』の「ぜごんとう」図
元文３年（1738）２月	コバンザメ	『筑前国産物絵図帳』の「ふなしとき」図
元文３年（1738）２月	ミヤコドリ	『筑前国産物絵図帳』の「みやこどり」図
元文３年（1738）５月	ハタタテダイ	『薩摩国産物絵図帳・秋冬』の「やばた魚」図

元文３年（1738）５月	コバンザメ	『薩摩国産物絵図帳・秋冬』の「ふなひとり」図
元文３年（1738）５月	エラブウミヘビ	『薩摩国産物絵図帳・秋冬』の「永良部鰻」図：爬虫類
元文３年（1738）？[3]	チカメキントキ	『越中国産物之内絵形』の「たいのみこ」図
元文３年（1738）？	マツカサウオ	『越中国産物之内絵形』の「よろひうを」図
元文３年（1738）？	コンゴウフグ	『紀州分産物絵図』の「こご魚」図
元文３年（1738）？	ヌタウナギ	『紀州分産物絵図』の「もつれ」図
元文３年（1738）？	ワレカラ	『紀州分産物絵図』の「われから」図
元文３年（1738）？	イタチウオ	『紀州勢州産物図』の「いたちうを」図
元文３年（1738）？	ハタタテダイ	『紀州勢州産物図』の「のぼりたて」図
元文３年（1738）？	スナメリ	『紀州勢州産物図』の「すさめ」図
元文３年（1738）？	コンゴウフグ	『尼崎図上』の「サイノウヲ」図
元文３年（1738）？	ヨウジウオ	『尼崎図上』の「ウミクチナハ」図
元文３年（1738）？	アカヤガラ	『尼崎図上』の「ヤガラ」図
元文３年（1738）？	キホウボウ？	『和泉図上』の「かなどう」図
元文３年（1738）？	シュモクザメ	『隠岐国産物絵図注書』の「かせ鰐」図
元文３年（1738）？	ヤツメウナギ	『出雲国産物名疏』の「七ツ目」図
元文５年（1740）11月11日	サケイ（鳥）	仙台城近くで捕獲（増補庶物類纂）
寛保２年（1742）３月	シイラ	狩野家で写生（栗氏魚譜Ｂ９）
寛保３年（1743）11月	タイマイ	加賀国宮腰浦で捕獲（本草綱目啓蒙）
寛保３年（1743）12月25日	トキ	将軍吉宗，東葛西での鷹狩で１羽を得る（徳川実紀）
延享１年（1744）２月24日	ペリカン	江戸浅草寺で見世物，東叡山門跡が本日観覧（浅草寺日記）
延享１年（1744）４月	ライチョウ	飛騨代官が幕府の命で乗鞍岳の雷鳥３羽を江戸に送る（編修地誌備用典籍解題14，堀田禽譜）
延享１年（1744）10月	イリエワニ？	薩州硫黄島沖で捕獲，藩に献上，長７～８尺（本草綱目算疏11，竜絵巻物）
延享４年（1747）４月	マンボウ	伊勢浦で捕獲，名古屋大須で見世物（錦窠魚譜13）
寛延１年（1748）４月２日	アシカ	越後糸魚川の浦浜で捕獲（越後名寄）
寛延１年（1748）５月中旬	アシカ	越後出雲崎の北，猪鼻村へ打ち上げられる（越後名寄）
寛延１年（1748）10月７日	サケガシラ	三浦半島の小坪浜（逗子近辺）の網漁で捕獲，長７尺５寸，平鮫一名銀鮫（随観写真・魚部）
寛延２年（1749）３月29日	マンボウ	讃岐国香西沖で捕獲，長９尺３寸（泰平年表，皇代系譜）
宝暦２年（1752）４月	タカアシガニ	相州小田原で長１丈の蜘蛛蟹を得る（随観写真・介部）
宝暦２年（1752）11月１日	キンチャクダイ	この日に到来（栗氏魚譜Ｂ２）
宝暦２年（1752）12月６日	コクガン	狩野純信が写生（鳥類図譜）
宝暦３年（1753）１月	チョウザメ	土佐の安芸浦で「ヨロイブカ」を捕獲，長１丈余（日本博物学年表）
宝暦４年（1754）２月中旬	アシカ	越後の寺泊浦に打ち寄せられる（越後名寄）
宝暦９年（1759）７月	ヒゴイ	江戸堺町で１尺と６寸の赤鯉の見世物（見世物研究）
宝暦９年（1759）10月29日	モンガラカワハギ	氏名未詳の人物が本日描く。正確な図で，のちに栗本丹洲が摸写（栗氏魚譜Ａ17）
宝暦10年（1760）４月15日	ブッポウソウ	大坂の浄安寺薬物会に森野通貞が雌雄を出品（文会録）
宝暦12年（1762）春	マンボウ	丹後国で捕獲，長５尺７寸（南楼随筆）
宝暦12年（1762）４月18日	マンボウ	武蔵国羽田で捕獲，長９尺（翻車考，栗氏魚譜Ｂ20）
宝暦13年（1763）３月６日	マンボウ	江戸品川沖で捕獲，長３尺（宝暦現来集）
宝暦13年（1763）夏	アカナマダ	仙台の奈武里浜で捕える（随観写真・魚部）
明和１年（1764）１月18日	ヘラサギ	将軍家治，亀有での鷹狩で１羽を得る（徳川実紀）
明和１年（1764）12月18日	クロトキ	将軍家治，小松川の鷹狩で２羽を得る（徳川実紀）：『徳川実紀』でクロトキの初見

明和２年（1765）７月22日	ハクビシン？	相模大山で雷雨後に捕らえた雷獣（震雷記）
明和２年（1765）８月？	マンボウ	江戸芝浦で捕獲，長１丈，両国で見世物（武江年表）
明和３年（1766）２月１日	クジラ	紀州熊野灘で得たという長７間半の鯨を大坂千日法善寺で見せる。大坂で初めての鯨の見世物（摂陽奇観）
明和３年（1766）11月27日	ヘラサギ	将軍家治，木下川での鷹狩で１羽を得る（徳川実紀）
明和３年（1766）12月５日	クロトキ	将軍家治，小松川での鷹狩で１羽を得る（徳川実紀）
明和５年（1768）１月13日	クロトキ	将軍家治，小菅での鷹狩で１羽を得る（徳川実紀）
明和５年（1768）５月10日	トキ	徳島藩が播磨国から取り寄せて放つ（トキの文献1027）
明和７年（1770）１月４日	クジラ	尾張国知多郡横須賀で捕獲，長６間半（諸家随筆集）
明和７年（1770）10月	ブッポウソウ	大和松山の森野武貞が江戸に持参（日本薬園史の研究）
明和７年（1770）11月27日	クロトキ	将軍家治，小松川での鷹狩で１羽を得る（徳川実紀）
安永３年（1774）２月	ノガン	大坂道頓堀で見世物，高野山の麓で捕えた（難波噺）
安永３年（1774）８月頃	シュモクザメ？	怪魚でんぽう鮫が尾張国知多郡横須賀の海に現われたが，形状の説明からシュモクザメらしい（諸家随筆集）
安永４年（1775）４月25日	マンボウ	摂津国兵庫で捕獲，長１丈（南楼随筆）
安永６年（1777）11月	ベニバト	肥後国詫摩（＝託麻）郡重富村で捕獲（奇鳥生写図）
安永６年（1777）12月13日	クロトキ	将軍家治，葛西での鷹狩で１羽を得る（徳川実紀）
安永７年（1778）春	マンボウ	土佐国安喜郡田野浦で捕える，長４尺８寸（南楼随筆）
安永８年（1779）９月２日	チョウザメ	阿波国名東郡津田浦で捕獲，鼻先～尾先は長１間，ザウザメという（栗氏魚譜Ｂ１，異魚図賛，阿淡産志）
安永８年（1779）12月23日	クロトキ	将軍家治，船堀での鷹狩で１羽を得る（徳川実紀）
安永８年（1779）12月	マンボウ	越前国敦賀で捕獲，長８尺（南楼随筆）
安永８年（1779）冬	マンボウ	若狭国小浜で捕獲，長９尺余（南楼随筆）
安永９年（1780）８月３日	ツルクイナ	この日「松平壱岐守様ヨリ来ル」の注記（奇鳥生写図）
安永９年（1780）	マンボウ	播磨国網干浦で捕える，長６尺（南楼随筆）
天明２年（1782）２月９日	トキ	将軍家治，王子での鷹狩で１羽を得る（徳川実紀）
天明２年（1782）５月18日	ブッポウソウ	伊予国板島郡財村で雌雄を捕える（観文禽譜）
天明３年（1783）春	ブッポウソウ	京都の上賀茂で捕獲，飼育する（笈埃随筆，桃洞遺筆２）
天明３年（1783）８月中旬	クジラ	摂津住吉浦へ来る。潮を吹くのを見に大勢がつめかけ，鯨は11月までその付近に留まる（摂陽奇観）
天明４年（1784）３月28日	マンボウ	豊前国恒見浦で捕える，長５尺７寸（南楼随筆）
天明４年（1784）12月６日	クロトキ	将軍家治，小松川での鷹狩で１羽を得る（徳川実紀）
天明４年（1784）冬	チョウザメ	下総国小堀と布川の間で鮭網にかかる（兼葭堂雑録）
天明６年（1786）以前	サケイ（鳥）	将軍家治の治世（1760～本年）に献上（観文禽譜）
天明７年（1787）４月19日	ウミガメ	江戸佃島の漁夫が中川で２匹捕獲して献上，長４尺（観文介譜）
天明８年（1788）12月	ライチョウ	加賀侯が水戸相公に白山産の雷鳥を贈る（観文禽譜）
寛政１年（1789）１月５日	トキ	将軍家斉，西新井での鷹狩で１羽を得る（徳川実紀）
寛政１年（1789）１月21日	クロトキ	将軍家斉，船堀での鷹狩で３羽を得る（徳川実紀）
寛政１年（1789）９月	ゲンロクダイ	山龍岳明海が写生（錦窠魚譜21）
寛政２年（1790）５月２日	トキ	加賀藩主，石川郡栗ヶ崎での鷹狩で13羽を得る（トキの文献60）：寛永16年に移入したトキがここまで増えた
寛政２年（1790）11月18日	クロトキ	将軍家斉，西新井での鷹狩で１羽を得る（徳川実紀）
寛政２年（1790）	ウミガメ	薩摩国高柳郡川内で捕える（本草図説28）
寛政３年（1791）６月	アカマンボウ	房州で捕獲，将軍・御三卿が観覧，長４尺２寸（栗氏魚譜Ｃ９，奇品図会）
寛政４年（1792）７月	イトウ（魚）	「カラフト嶋……ツンナイ」で捕獲（博物舘魚譜12）
寛政４年（1792）10月13日	クロトキ	将軍家斉，亀戸での鷹狩で１羽を得る（徳川実紀）

寛政４年（1792）冬	アシカ	肥前国松浦郡大嶋の漁師が捕える（甲子夜話80）
寛政５年（1793）春	サギフエ（魚）	水戸藩が栗本丹洲に鑑定を依頼（栗氏魚譜Ｂ２）
寛政５年（1793）春	キホウボウ類	水戸藩が栗本丹洲に鑑定を依頼（栗氏魚譜Ｂ２）
寛政５年（1793）８月	エトピリカ	堀田正敦がその丸剥ぎを贈られる（堀田禽譜）
寛政６年（1794）８月	クジラ	堺の沖で捕獲，長８間余（摂陽奇観）
寛政６年（1794）９月中旬	コバンザメ	奥州津軽郡鰺ヶ沢の海で捕獲（小判魚）
寛政６年（1794）冬	ウチワフグ	志摩国浪切浦で獲る（博物舘魚譜10，栗本写生図）
寛政７年（1795）９月	アシカ	江戸葺屋町で見世物，引札に筑前国響灘鏡ヶ崎で捕え，京都大坂でも興行とある（甲子夜話・続23）
寛政７年（1795）10月	シラガホオジロ	大坂で捕獲？（堀田禽譜）：原記載名は「嶋ほふじろ」
寛政７年（1795）12月９日	クロトキ	将軍家斉，亀有での鷹狩で１羽を得る（徳川実紀）：『徳川実紀』でのクロトキの記録はこれが最後だが，この頃から記事が不完全になるので，減ったとはいえない
寛政７年（1795）12月？	シロフクロウ	摂津国中浜村で捕獲（堀田禽譜，桃洞遺筆５）
寛政７年（1795）	オサガメ	琉玖（屋久島）で捕獲（博物舘虫譜）
寛政９年（1797）⑦月15日	ハナオコゼ	佐渡で捕獲（異魚図纂）
寛政９年（1797）９月９日	マンボウ	佐渡の姫津で捕獲，長１丈（翻車考）
寛政10年（1798）５月１日	クジラ	江戸品川沖で突き止めた９間一尺の鯨を浜御殿に引き寄せ，将軍家斉が上覧，ついで人々が見物（半日閑話，海鰌談）
寛政10年（1798）５月17日	オサガメ	水戸村岡領水木村の沖で捕獲（博物舘虫譜）
寛政10年（1798）６月	カブトガニ	瓊浦（長崎）御船蔵で図写（蟹譜，博物舘虫譜）
寛政10年（1798）10月	ツバメウオ	岩原某が写生（栗氏魚譜Ｂ３）
寛政10年（1798）	ライチョウ	信濃国諏訪で捕獲（堀田禽譜）：原記載名は「イハ鳥」
寛政11年（1799）冬	ホッキョクグマ？	白熊の子を蝦夷から江戸に送る（東夷物産志稿）
寛政12年（1800）２月	イリエワニ？	奄美大島で捕獲，「面ノ長サ三尺」（島津家動物写生図）
寛政12年（1800）５月28日	リュウグウノツカイ	肥前国唐沢姉子の灘で捕獲，長５尺２寸（写生物類品図）
寛政12年（1800）夏	リュウグウノツカイ	出雲国日ノ御崎で捕獲（写生物類品図）
寛政12年（1800）夏	ヤツメウナギ	越後国魚沼郡清津川産（北越物産写真）
寛政12年（1800）夏	ウケクチウグイ	越後国魚沼郡千隈川産（北越物産写真）：新種と判明したのは20世紀後半だったが，土地の人々は昔から他種と区別して「頬長」と呼んでいた。➡本間（1989）
寛政12年（1800）夏	マツカサウオ	越後国頸城郡犀浜付近で得るが，稀（北越物産写真）
寛政12年（1800）９月30日	ウミガメ	八丈島より幕府に献上（博物舘虫譜）
寛政12年（1800）12月13日	トキ	将軍家斉，小松川での鷹狩で１羽を得る（徳川実紀）
享和１年（1801）６月12日	オオサンショウウオ	江戸板橋水車の堰下で捕獲，長４尺１寸。同15日将軍家斉が上覧，ついで見世物となる（武江年表，博物舘虫譜）➡本朝諸国風土記３
享和１年（1801）６月21日	ヨウジウオ	栗本丹洲が初めて目にする，イワシに混じっていた（異魚図纂，写生物類品図）
享和１年（1801）秋	アカマンボウ	阿波国海部郡浅川浦で捕獲（阿淡産志，物産宝庫・甲２）
享和１年（1801）	アザラシ	常陸国で捕える（本草図説25）
享和２年（1802）２月	マンボウ	常陸国磯浜（現大洗）で捕獲（査魚志）
享和２年（1802）３月18日	フリソデウオ	和歌山南方の小浦で幼魚を採る，長５寸（桃洞遺筆４）
享和２年（1802）５月19日	チョウザメ	幕府医学館に剥製を初めて展示（栗氏魚譜Ａ２）
享和３年（1803）３月	ルリハタ	房州で捕えた魚を魚商和泉屋五兵衛が田安公に献上（栗氏魚譜Ｂ10）
享和３年（1803）４月27日	オサガメ	備前国児島アツトで捕獲，長１間半（日本博物学年表）

文化１年（1804）９月15日	ライチョウ	老中安藤対馬守信成，乗鞍岳で捕えた雷鳥雄１羽を江戸城西丸に献上（堀田禽譜）[7]
文化２年（1805）５月16日	マンボウ	下総国船橋の漁師が捕える，長１丈１尺（巷街贅説）
文化２年（1805）11月	オサガメ	越後国蒲原郡新発田で捕える（博物舘虫譜）
文化３年（1806）４月７日	タイマイ	土佐赤岡浦で得る，長２尺ほど（桃洞遺筆５）
文化３年（1806）10月24日	チョウザメ	蝦夷で得た個体を戸川筑前守が江戸に持参，この日栗本丹洲が写生する（栗氏魚譜Ａ２，古今要覧稿556）
文化４年（1807）１月９日	ラッコ	蝦夷ウルップ島で捕獲（博物舘獣譜）
文化４年（1807）３月	アシカ	江戸の芝高輪で捕獲（楽只亭品物図彙）
文化４年（1807）７月末	クロウミツバメ	下北半島西北岸の佐井で得る（堀田禽譜）：原記載名は山燕一種・黒燕
文化４年（1807）11月27日	アシカ	江戸高輪沖で捕獲，将軍家斉上覧（泰平年表，谷津1940）
文化４年（1807）12月19日	アシカ	対馬国与良郷安神村で撃ちとる（小松1991）
文化５年（1808）５月６日	オサガメ	能登国風戸浦に死んで漂着（三州山海異品）
文化５年（1808）11月	タカアシガニ	名古屋東懸所前で見世物（錦窠蟹譜１）
文化５年（1808）冬	ケイマフリ	エトロフ島に派遣された仙台藩士が得る（堀田禽譜）：原記載名は「しちり」
文化６年（1809）４月12日	ツノメドリ	尾張熱田沖で捕獲，名古屋で飼ったが，５月５日に死んだ（水谷氏禽譜，猿猴庵文化日記，錦窠禽譜・続12）[8]
文化８年（1811）	コウノトリ	江戸浅草称念寺の屋根に巣を作る（筠庭雑録）
文化11年（1814）４月	マンボウ	常陸国久慈ノ浜で捕獲（常陸物産志16）
文化12年（1815）８月26日	ペリカン	豊後国海部郡掻懐郷で撃つ（堀田禽譜）
文化12年（1815）９月	クビワオオコウモリ	名古屋大須で「寒号虫」の芸を見せる（猿猴庵文化日記）
文化13年（1816）６月３日	エトピリカ	雌雄が蝦夷より来る（水禽譜）
文化13年（1816）７月	オオミズナギドリ	捕獲品を江戸城へ献上（堀田禽譜）
文化13年（1816）	レンカク（鳥）	福岡藩領内で捕獲（禽鏡３，百鳥譜残欠）
文化14年（1817）４月19日	アツモリウオ	幕府医学館薬品会への出品（乾品か）を栗本丹洲が写生する（栗氏魚譜Ｂ15）：当時の名は龍宮ノ鶏
文化14年（1817）５月25日	ギンザメ	栗本丹洲が堀田正敦から乾品を借り写す（魚譜）
文化14年（1817）６月２日	トキ	徳島藩，田畑を荒らすので銃猟を許可する（トキの文献1027）：明和５年（1768）に放鳥したものが増え過ぎた
文政２年（1819）④月上旬	アザラシ	越後柏崎で漁民が得る（耽奇漫録９集，本間1991）
文政２年（1819）④月中旬	イザリウオ	栗本丹洲が写生，解説を記す（栗氏魚譜Ｂ10）
文政２年（1819）10月15日	オオサンショウウオ	尾張国の御伊勢川（笈瀬川）で捕獲，翌月名古屋広小路で見世物に出る，長２尺７寸（猿猴庵文政日記）
文政３年（1820）３月９日	サカマタ	江戸の品川沖で，長３間半と２間半の鯨２頭を獲る（栗氏魚譜Ａ22，栗氏魚譜Ｃ・鯨）
文政３年（1820）３月14日	エラブウミヘビ	阿波国海部郡牟岐浦で捕える。原記載名ウミクチナワ，長４尺で，「藍色ノ横条アリテ環ノ入タルガ如シ」（重修本草綱目啓蒙・補記）：爬虫類のウミヘビ
文政３年（1820）４月21日	クジラ	浪華木津川沖で小鯨を捕獲，長２間半（栗氏魚譜Ｃ・鯨）
文政３年（1820）夏	ペリカン	阿波国那賀郡庄村に飛来，望遠鏡で数日観察・写生（重修本草綱目啓蒙・補記）
文政３年（1820）７月４日	ハナオコゼ	堀田正敦が栗本丹洲に鑑定を依頼，前日まで生存していた（異魚図纂）
文政３年（1820）８月27日	イトヒキアジ	栗本丹洲が堀田正敦から生きた小魚を貰って写生，生魚を手にしたのは初めて（栗氏魚譜Ｂ２・10）

文政３年（1820）冬	コバンザメ	丹波亀山藩城代松平芝陽，江戸飯田町中坂の魚店で見かける，長２尺（蘭畹摘芳三編８）
文政４年（1821）２月	トクビレ（魚）	宮城の本吉郡歌津浜で捕える（栗氏魚譜Ｂ10，博物舘魚譜２）：この魚の図で捕獲地・日付がわかるのは稀
文政４年（1821）６月初旬	アネハヅル	尾張国葉栗郡黒田村で捕獲し藩に献上，９月将軍家斉に献上（姉羽鶴之図，猿猴庵文政日記）
文政４年（1821）10月	オサガメ	丹後国の沖で網にかかる（博物舘虫譜）
文政５年（1822）８月	イトマキエイ	伊予国宇和郡吉田の浜で捕獲（魚譜）
文政５年（1822）10月	カンムリツクシガモ	函館亀田村で雌雄を捕獲，翌年幕府に献上（堀田禽譜）
文政６年（1823）４月21日	ウミガメ	尾張日置の漁師が捕え，見世物とする（猿猴庵文政日記）
文政６年（1823）６月	イトヒキアジ	長門国萩の鶴江で，小さな個体を捕獲（栗氏魚譜Ｂ10）
文政６年（1823）12月９日	エゾライチョウ	箱館代官新井田金右衛門が２羽を得る（堀田禽譜）
文政７年（1824）２月28日	ウチワフグ	栗本丹洲が川村清兵衛所蔵品を写生（栗氏魚譜Ａ17）
文政７年（1824）	リュウグウノツカイ	紀伊の古座に死魚が漂着（熊野物産初志）
文政８年（1825）６月２日	イザリウオ	堀田正敦が大洲侯所蔵図を栗本丹洲に渡す（異魚図纂）
文政８年（1825）９月	ギンザンマシコ	蝦夷地ヱトロフ嶋に渡来，数多く捕えて江戸に送り，幕府に献上，滝沢馬琴も松前侯から分与された（禽鏡２）
文政９年（1826）２月６日	ヒゴイ	名古屋上畠橋筋で長３尺余の「猩々鯉」を見せる（猿猴庵文政日記）：名古屋ではまだ「珍物」だった
文政９年（1826）２月19日	オオサンショウウオ	江戸へ向かうシーボルトが鈴鹿山中産の生きた個体を門人湊長安から受け取る（江戸参府紀行）
文政９年（1826）２月27日	タカアシガニ	シーボルトが興津の手前で見る（江戸参府紀行）
文政９年（1826）２月27日	アホウドリ	シーボルトが三保の松原で購入（江戸参府紀行）
文政９年（1826）３月下旬	ツシマヤマネコ？	筑前で虎ノ子と称する見世物（山猫図説）
文政９年（1826）４月27日	トクビレ（魚）	大槻玄沢が奥州本吉郡で獲れた個体の乾品を桂川国寧（翠藍）宅に持参（蘭畹摘芳四編７，錦窠魚譜16）
文政９年（1826）秋	ペリカン	紀州紀ノ川河口に雌雄が出現（紀南六郡志）
文政10年（1827）２月	アシカ	上総沖で捕獲（本草図説24）
文政10年（1827）６月	カブトガニ	尾張国知多郡で捕獲，翌閏６月初めより名古屋広小路で見世物，大評判（猿猴庵文政日記）
文政11年（1828）２月	アホウドリ	石見国浜田で捕獲（南風戇図説）
文政11年（1828）６月10日	オオサンショウウオ	名古屋柳薬師で，この日より見世物（見世物雑志）
文政11年（1828）冬	セミホウボウ	駿河国釜津浜で異魚を捕獲（栗氏魚譜Ｂ15，錦窠魚譜14）
文政12年（1829）３月	サギフエ	魚店が岩崎灌園宅？に持参（博物舘魚譜９，弘賢随筆19）
文政12年（1829）４月	アツモリウオ	武蔵石寿が相州江ノ島で得る（奇魚類）：貝屋で乾品を入手したのではないか➡1817年４月項
文政12年（1829）６月９日	サギフエ（魚）	毛利梅園が芝高輪で魚商から買う（次の２魚も同時，梅園魚譜３）
文政12年（1829）６月９日	イシガキフグ	毛利梅園が芝高輪で魚商から買う（梅園魚譜３）
文政12年（1829）６月９日	ルリハタ	毛利梅園が芝高輪で魚商から買う（梅園魚譜３）
文政12年（1829）秋	アカマンボウ	阿波国海部郡牟岐浦で捕える（阿淡産志，物産宝庫甲２）
天保１年（1830）３月19日	アシカ	長崎港で撃つ（甲子夜話・続41，図録・日本博物学事始）
天保１年（1830）４月	アホウドリ	阿波国津田浦に死鳥が漂着（豊文禽譜）
天保１年（1830）５月21日	ライチョウ	同日付で「栗本丹洲ヨリ来ル」と注記（梅園禽譜）(9)
天保２年（1831）１月18日	リュウグウノツカイ	筑前国志摩郡西浦で得る（写生物類品図，栗氏魚譜Ｂ１）
天保２年（1831）６月９日	ホウネンエビ	献上品を，将軍か大奥の依頼で鑑定（博物図19）
天保２年（1831）７月６日	リュウグウノツカイ	土佐国幡多郡小才角に２匹漂着，１丈４尺４寸および１丈８尺４寸（写生物類品図，栗氏魚譜Ｂ７・Ｃ10）

天保３年（1832）１月	アシカ	平戸の釜田浦横嶋で捕獲（甲子夜話・続77）
天保３年（1832）２月	イタチウオ	肥前平戸で捕獲，その鑑定を栗本丹洲に依頼する（栗氏魚譜Ｂ14）
天保３年（1832）４月21日	クジラ	浪華木津川沖で長さ２間半の鯨を捕獲（栗氏魚譜Ａ22，栗氏魚譜Ｃ・鯨）
天保３年（1832）５月６日	アホウドリ	江戸小石川馬場に落ちる（梅園禽譜，甲子夜話・続77）
天保３年（1832）８月20日	オオサンショウウオ	京都二条城の堀で捕える，長３尺５寸（本草図説４）
天保３年（1832）11月22日	アザラシ	筑前国糟屋郡箱崎浦で捕獲，長５尺余（博物図12）
天保４年（1833）５月下旬	コブシメ？	熱田沖で捕獲した長３尺余のイカを，名古屋柳薬師で見世物とする（見世物雑志）：図はコウイカに似る
天保４年（1833）７月２日	アザラシ	尾張国熱田で捕獲，見世物に出す（名陽見聞図会２下）
天保４年（1833）11月	オオサンショウウオ	名古屋大須で見世物，長さ３尺５～６寸（見世物雑志）
天保５年（1834）１月	トキ	本月刊の江戸花鳥風月名所案内『みやびのしをり』に，トキの名所として寺島白髭明神森と千住を挙げる
天保５年（1834）１月	コウノトリ	上記『みやびのしをり』に，コウノトリの名所として上野中堂・不忍池・浅草寺・東本願寺・猿江重願寺を挙げる
天保５年（1834）２月27日	オサガメ	江戸小田原町の魚店で，高木春山が写生（本草図説28）
天保６年（1835）⑦月10日	マツカサウオ	幕臣毛利梅園が乾品を写生（梅園魚譜２）
天保６年（1835）８月２日	アオヤガラ	幕臣毛利梅園が写生（梅園魚譜２）
天保６年（1835）８月５日	ヨウジウオ	幕臣毛利梅園が写生（梅園魚譜２）
天保６年（1835）８月22日	ツバクロエイ	行徳の魚商が毛利梅園宅に持ち込む（梅園魚譜２）
天保６年（1835）９月25日	イワトコナマズ	幕臣毛利梅園が写生，琵琶湖特産種（梅園魚譜２）
天保６年（1835）10月18日	モンガラカワハギ	宮（名古屋市熱田区内）の魚屋が持ち来る（錦窠魚譜22）
天保７年（1836）３月28日	アネハヅル	幕臣毛利梅園が写生（梅園禽譜）
天保７年（1836）４月29日	アザラシ	名古屋東寺町西蓮寺で，尾張国熱田で得た個体を見世物に出す（見世物雑志，名陽見聞図会５上）
天保８年（1837）２月３日	トキ	幕臣毛利梅園宅（現文京区白山）に飛来（梅園禽譜）
天保９年（1838）５月	アザラシ	相模国辻堂に近い馬入川に２匹出現，長５尺。昼は付近の海に出，夜は馬入川に帰る（朝暾抄）
天保９年（1838）６月17日	アザラシ（上項続き）	辻堂で上記のうち１匹を捕え，23日将軍家慶が江戸城で上覧，７月初めより両国で見世物（泰平年表続編，海獣考）
天保10年（1839）２月29日	ライチョウ	幕臣毛利梅園が死鳥を写生（梅園禽譜）
天保10年（1839）４月10日	ハリセンボン	幕臣毛利梅園が知人の乾品を写生（梅園魚譜３）
天保10年（1839）５月	ジャコウネズミ？	京都で捕獲，部屋に香気が漂う（随意雑識・物産32）
天保10年（1839）10月	キンチャクダイ	魚商が毛利梅園宅に持ち込む（梅園魚譜３）
天保11年（1840）10月22日	ダイオウイカ	上総国金谷沖で捕獲，長２間半（天保雑記35）
天保12年（1841）春	オオサンショウウオ	江戸城の堀浚いで竜ノ口堀より捕獲，作業終了後に堀へ戻す，長３尺（皇代系譜）
天保13年（1842）２月	チョウザメ	土佐国秋浦で捕獲した「菱鮫」，長８尺（紫藤園海鯊図）
天保13年（1842）７月初旬	ハクビシン？	周防国冨田村で捕獲（皇代系譜）
弘化１年（1844）12月	ノガン	尾張国田楽村で雌鳥を捕獲（錦窠禽譜４）
弘化４年（1847）４月１日	ブンチョウ	京都山本読書室に雄が飛来，１月後に雌も来て，ともに飼育。すでに本種はかなり野生化していた（百品考二下）
嘉永１年（1848）12月21日	オサガメ	庄内加茂で捕獲，長３～４尺（遊覧記）
嘉永４年（1851）４月11日	クジラ	武蔵国荏原郡大井村の海岸に長さ３間の鯨が漂着，浅草奥山で見世物とする（武江年表）
嘉永４年（1851）４月	マンボウ	尼崎鳴尾村の浜に漂着，堀田龍之助が鑑定，長１丈３尺余（錦窠魚譜13）

嘉永４年（1851）７月25日	ライチョウ	山本渓愚が越中立山の山頂付近で２羽を見る（入越日記）
嘉永４年（1851）10月	ツシマヤマネコ	江戸西両国広小路で見せた虎は，対馬の深山で捕えた山猫だという（藤岡屋日記・珍説）
嘉永５年（1852）②月10日	アホウドリ	庄内鶴岡で松森胤保が写生（遊覧記）
嘉永５年（1852）②月11日	マンボウ	庄内三瀬で捕獲（遊覧記）
嘉永５年（1852）②月16日	ツリスガラ	庄内鶴岡で松森胤保が写生（両羽禽類図譜）
嘉永５年（1852）４月24日	エトロフウミスズメ	京都？の吉田村で捕獲（本草写生図譜）
嘉永６年（1853）５月３日	ダイオウイカ	上総国金谷で捕獲，江戸で見世物，長１丈７尺（藤岡屋日記）
嘉永６年（1853）５月	オオサンショウウオ	上項と同時に生品を見世物とする（藤岡屋日記）
安政２年（1855）７月５日	チョウザメ	筑後川河口付近で捕獲（本草写生図譜）
安政２年（1855）９月	チョウザメ	丹後国田辺で捕獲（本草写生図譜）
安政３年（1856）４月19日	マンボウ	備前国児島郡阿津村沖で捕獲，長６尺５寸（日本博物学年表）
万延１年（1860）４月１日	セイウチ	蝦夷川汲（亀田半島）に漂着，長５尺余（写生物類品図）
万延１年（1860）12月17日	カンムリツクシガモ	関根雲停が江戸で写生（博物舘禽譜）：原記載名リキウ鴨
文久１年（1861）３月25日	オナガドリ（尾長鶏）	名古屋の旭園博物会に出品，尾長９尺。当時は土佐藩からの持出し厳禁で珍しかったという（錦窠禽譜・続３）
文久１年（1861）４月25日	トキ	ロシアの植物学者マキシモヴィッチ，蝦夷駒ケ岳麓で幼鳥を撃つ（トキの文献162・164・168）
文久１年（1861）８月11日	カンムリツクシガモ	関根雲停が江戸で翼を写生（博物舘禽譜）：1860年12月項と同一個体だろう
文久２年（1862）２月24日	オガサワラオオコウモリ	幕府が派遣した小笠原諸島調査隊が母島で捕獲，江戸に持ち帰る（幕末小笠原島日記）
文久２年（1862）５月	ホウネンエビ	江戸千住や上総の海浜近くの村で発生（博物舘虫譜）
文久２年（1862）８月	ペリカン	尾張国熱田の桜新田で捕獲（ガラン鳥図）
文久３年（1863）11月	ルリハタ	尾張の魚商が持ち込み，伊藤圭介が写生（錦窠魚譜22）
元治１年（1864）６月20日	コウノトリ	江戸浅草寺本堂の屋根に巣（遊覧記）
元治１年（1864）11月24日	ソデグロヅル	江戸日本堤で松森胤保が写生（遊覧記）
慶応１年（1865）１月18日	オオサンショウウオ	江戸浅草奥山の見世物に出る，長４尺余（遊覧記）
慶応１年（1865）３月14日	コウノトリ	江戸本所の五百羅漢寺サザイ堂の屋根に巣（遊覧記）
慶応１年（1865）５月15日	クロトキ	武蔵国野田で松森胤保が写生（遊覧記）
慶応２年（1866）８月11日	ヨタカ	名古屋の東山で捕獲，ブッポウソウと誤認（錦窠禽譜２）
慶応３年（1867）１月25日	シマノジコ	庄内鶴岡で松森胤保が写生（両羽禽類図譜）
明治１年（1868）12月19日	カンムリツクシガモ	松森胤保が江戸浅草の鳥屋で見る（大泉諸鳥写真画譜）：鳥屋の呼び名はリキウカモ
明治１年（1868）冬	ギンザメ	阿波産のものを大坂で見る（博物舘魚譜10）

（１）ここに記したように，盛岡藩では毎年１～数頭のオットセイを捕獲，陰茎などを補腎薬，いわゆる「腽肭臍」として贈呈用などに用いていた。その慶安２～４年の記録だけを本年表に示した。もっとも，すべてが真のオットセイだったかどうかは不明である。

（２）従来の美術書でタンチョウ（丹頂）としているのは誤り。

（３）『小笠原島記事』冊４に「[延宝三年六月] 廿日，幕府台覧，画師ヲシテ其産物ヲ屏風ニ画カシム」との記述があるが，その屏風がどうなったかはわからない。

（４）狩野常信は無人島から持ち帰ったタコノキの実も写生し，『草花魚貝虫類写生図』巻10に残した。

（５）この記載は年記を欠くが，前後の記事から享保19年と推定。

（６）吉宗政権下の幕府は薬剤自給の目的で，各地へ採薬使を派遣したり，朝鮮人参や砂糖の国産化を試みたりした。その一環として，享保20年（1735）閏３月から４月にかけて，各藩に対し，利用の有無にかかわら

ず領内の産物の名称を書き出すように通達する。これが享保元文全国産物調査といわれるもので，各藩はそれぞれ「産物帳」を提出したが，名称だけでは実体が不明の品々には，さらに「註書」や「絵図」を出させた。本年表の元文元年（1736）から同３年までの記事は，享保元文諸国産物調査で各藩が幕府に提出した産物絵図帳の完成あるいは提出年月に置いている。『越中国産物之内絵形』以下は完成・提出日付が未詳であるが，産物帳の大半は元文３年（1738）末までに提出されたと推定されているので，すべて元文３年項に置いた。また，各資料は，「文献一覧」の『享保元文諸国産物帳』の項に一括した。

（７）白井光太郎著『博物学年表』は，誤って文政元年（1818）の項に置く。

（８）原記載名は「エトピルカ」だが，各資料にある図はツノメドリである。

（９）原文は「文化元寅年」だが，同年は「子」年。十二支と本図譜の作成年代から，天保元庚寅年と思われる。

（付）年表中の人名解説

伊藤圭介（1803〜1901）：尾張の医師，通称圭介，号錦窠。水谷豊文の弟子で，シーボルトにも師事する。同地の博物家の会である嘗百社の中軸として活動，植物に詳しかった。

岩崎灌園（1786〜1842）：幕臣。名は常正，通称源蔵，号灌園。小野蘭山門下で，植物に詳しかった。主著は『本草図譜』92冊。若年寄堀田正敦の庇護を受けた一人。

大槻玄沢（1757〜1827）：仙台藩医，名は茂質（しげかた），通称玄沢，号磐水。蘭学普及につとめたが，博物誌にも関心が深く，その編著『蘭畹摘芳（らんえんてきほう）』42冊にも博物誌的資料が多い。栗本丹洲とは親交があり，また若年寄堀田正敦からも便宜をはかられている。

桂川国寧（1797〜1844）：幕医桂川家の６代。国寧（くにやす）は名，通称の甫賢や，号の桂嶼をよく用いた。栗本丹洲と親しかったようである。

狩野常信（1636〜1713）：幕府御絵師で，木挽（こびき）町狩野家の２代，狩野探幽の甥。『鳥写生図巻』『草花魚貝虫類写生図』はともに半世紀にわたるスケッチ集で，有用な博物誌資料。

栗本丹洲（1756〜1834）：幕医。江戸で博物誌の伝統を築いた田村藍水の次男，名は昌臧（まさよし），通称瑞見（４代），号丹洲。動物に詳しく，江戸城内などで虫や魚の鑑定をしばしば依頼された。主著は『千虫譜』『栗氏魚譜』。大槻玄沢，松平芝陽，堀田正敦などと親しかった。

シーボルト，P・F（1796〜1866）：文政６〜12年（1823〜29）在日，同９年に出府。

関根雲停（1804〜77）：幕末期〜明治初期に活躍した博物画家。『草木錦葉集』や『草木奇品家雅見（かがみ）』の草木画を描き，一連の『博物舘図譜』にそのスケッチが多数残る。

高木春山（？〜1852）：名は以孝，号春山。江戸下目黒に住み，諸侯御用達を業とし，本草を薩摩藩医の曽 占春に学んだといわれる。主著は『本草図説』（現存195冊）。

滝沢馬琴（1767〜1848）：著名な文筆家だが，動植物にも関心が深かった。とくに鳥類は飼育経験も豊富で，自身が編集執筆し，養子渥美赫州（あつみかくしゅう）に描かせた図譜『禽鏡』がある。

堀田龍（たつ）之助（1819〜88）：大坂で西洋製薬業を営み，紀伊藩の本草家畔田翠山（くろだすいざん）に師事。

堀田正敦（まさあつ）（1755〜1832）：仙台藩主伊達宗村の末子で，堅田藩主堀田正富の養子となる。42年間も幕府の若年寄をつとめ，栗本丹洲と親しく，大槻玄沢や岩崎灌園を庇護した。自身も博物家で，『観文禽譜』『観文獣譜』『観文介譜』や，通称『堀田禽譜』などの著作がある。

マキシモヴィッチ，C・J（1827〜91）：ロシアの植物学者。万延元年（1860）から元治元年（1864）まで滞日して，日本の植物を採集・研究する。

松岡玄達（1668〜1746）：京都の本草家。名は玄達，通称恕庵，号怡顔斎。稲生若水に師事し，弟子に小野蘭山がいる。著作は『用薬須知』『怡顔斎桜品』『怡顔斎介品』など。

松平芝陽（1775〜1824）：丹波亀山藩主松平信直の第７子で，同族但馬松平家を継ぎ，のち亀山藩の江戸詰城代となる。栗本丹洲と親交があり，大槻玄沢とも交流があった。以前は，幕臣の博物家設楽（しだら）妍芳と混同されていた。

松森胤保（たねやす）（1825〜92）：庄内藩士で，のち支藩松山藩の付家老となる。主著『両羽博物図譜』のうちの『両羽禽類図譜』は半世紀にわたるスケッチと観察の記録で，本邦初記録の鳥類が少なくない。また，『遊覧記』は幕末期の江戸の鳥屋や野鳥などの好資料である。

武蔵石寿（1766〜1860）：幕臣。通称孫左衛門，号石寿・翫珂亭。江戸の博物家の会である赭鞭会の一員で，『目八譜』は江戸時代最大・最高の介類図譜として著名。

毛利梅園（1798〜1851）：幕臣。名は元寿（もとひさ），号梅園・写生斎など。『梅園魚譜』『梅園介譜』『梅園草木花譜』などの著作は幕末期最高の図譜の一つ。赭鞭会の人々などとも親しかった。

森野通貞・武貞：通貞（1690〜1767）は大和国宇陀郡松山に森野薬園を創始，武貞はその子息。

山本渓愚（1827〜1903）：京都の山本読書室を創始した山本亡羊の６男，名は維慶，字章夫，号渓山・渓愚。主著は『本草写生図譜』。

動　物　各　論

この年表での登場件数は，狩猟対象のクロトキ（12件）とオットセイ（９）を除くと，マンボウ（28），アシカ（14），オオサンショウウオ（14），ペリカン（11），オサガメ（10），クジラ（10），チョウザメ（９），ライチョウ（８），ウミガメ（７），アザラシ（６），ブッポウソウ（６），アカマンボウ，コバンザメ，マツカサウオ，リュウグウノツカイ，ウトウ（以上，各５）……の順である。以下，いくつかのグループに分け，要点を記しておく。（　）内には，該当項の記載年を西暦で示してある。

（1）魚類

①大型の奇魚・珍魚

●マンボウが28件と飛び抜けて多いが，目立つ上に，かなり普通に見られる種類であること，動作が緩慢で捕えやすいこと，献上されたり見世物になったりして日付が残りやすいことなどが記録の多さにつながっている。マンボウとは縁遠いが，体型が似るアカマンボウも５件記録されている（1647・1732・1791・1801・1829）。うち３件が房州，２件が阿波国である。

●アカマンボウ目に属するアカナマダ（1763），フリソデウオ（1802，幼魚）や，サケガシラ（1748）も，１件ずつ記録されている。

●リュウグウノツカイもアカマンボウ目の大魚，細長い体（最大10m）で鰭が赤く，また鰭の一部が糸状に長く伸びるなどの特徴から目につきやすい。年表に記載したのは下記の５件である（産地など要点だけを示した。詳細は年表を参照：以下，同じ）。

寛政12年（1800）５月28日　肥前国唐沢姉子の灘
寛政12年（1800）夏　出雲国日ノ御崎
文政７年（1824）　紀伊の古座（死魚）
天保２年（1831）１月18日　筑前国志摩郡西浦
天保２年（1831）７月６日　土佐国幡多郡小才角（２匹）

●チョウザメ：突出した吻をもつ，体に５列に並ぶ菱形の鱗があるなど，異様な魚だからか，下記９件もの記録がある。土佐・阿波・下総・筑後・丹後と本州中部以南でも得られているので，北海道石狩川や天塩川に来る種名チョウザメ（別名ミカドチョウザメ）のほかに，近縁の数種類が含まれている可能性が高い。

享保２年（1717）　松前藩主が将軍吉宗の命で献上
宝暦３年（1753）１月　土佐の安芸浦で捕獲
安永８年（1779）９月２日　阿波国名東郡津田浦で捕獲
天明４年（1784）冬　下総国小堀と布川の間で捕獲
享和２年（1802）５月19日　幕府医学館に剥製を展示
文化３年（1806）10月24日　蝦夷産の個体を栗本丹洲が写生
天保13年（1842）２月　土佐国秋浦で捕獲
安政２年（1855）７月５日　筑後川河口付近で捕獲
安政２年（1855）９月　丹後国田辺で捕獲

●サメ・エイ類：独特の姿をしているのでスケッチは少なくないが，年記を添えた例は限られる。年表では，異様な形態をもつシュモクザメが元文３年（1738）の『隠岐国産物絵図注書』と安永３年（1774）の２件，同じく異魚イトマキエイ（マンタ，1822），ツバクロエイ（1835），オオセ（1737）の各１件だけである。

●その他：ギンザメ（1737・1817・1868），シイラ（1742）や，北方産のイトウ（1792），ダイナンウミヘビ（1737）など。ウミヘビの名がつくのは，魚類のほかに爬虫類（エラブウミヘビ，後出）もあるが，江戸時代には蛇扱いされず，魚の仲間とされていた。

②中型・小型の奇魚・珍魚

●乾品とされた種類：当時は国内で液浸標本を作れず，魚類は乾燥して保存した。年表に所収しなかったタツノオトシゴやハコフグのほか，アツモリウオ（1817・1829），トクビレ（1730・1821・1826），セミホウボウ（1737・1828），マツカサウオ（1679・1737・1738・1800・1835），コバンザメ（1737・1738の２件・1794・1820），ウミテング（1712），ヨウジウオ（1736・1738・1801・1835），コンゴウフグ（1738の２件），ウミスズメ（1679），ハリセンボン（658・1839），キホウボウ（1738・1793）など，乾品には大きな鰭や，刺・角などをもつ奇品が多い。これらは博物家自身が乾燥標本にしたほか，各地で乾物を土産物として売っていた。とくに人気が高かったらしいトクビレやアツモリウオ，コンゴウフグ，マツカサウオは，原産地以外にもいろいろな土地に出回っていたらしい。たとえば，武蔵石寿がアツモリウオを相州江ノ島で得ている（1829）が，おそらく同地の貝屋で入手した乾品と思われる。このような場

合があるので，入手地が即産地とはいえない。

●美しい種類:ゲンロクダイ（1789),キンチャクダイ（1752･1839）およびハタタテダイ（1738の２件）などチョウチョウウオの仲間や，イトヒキアジ（1679・1820・1823），チカメキントキ（1738），モンガラカワハギ（1759・1835），ルリハタ（1803・1829・1863)。

●形の変わった魚：アカグツ（1691），イザリウオ（1819・1825），イシガキフグ（1829），イタチウオ（1738・1832），ウチワフグ（1794・1824），サギフエ（1793・1829の２件），ソコダラ（1737），ツバメウオ（1798），ヌタウナギ（1737・1738）、ハナオコゼ（1797・1820），ヒウチダイ（1737），ヤガラの類（1736・1738・1835），ヤツメウナギ（1738・1800）など。

③ヒゴイ：天正２年（1574）に琵琶湖の竹生島付近で捕えた２尺５寸の「金魚」は，おそらく突然変異で体色が変化したヒゴイ（緋鯉）であろう。このような突然変異個体をもとに品種改良が進められて，いわゆる錦鯉が生まれるのはやや後である。ヒゴイの見世物の初見は江戸で宝暦９年（1759）に見せた２匹（見世物研究），珍しいとて大当たりだったという。名古屋では文政９年（1826）が初めてだった（猿猴庵文政日記)。

④研究者を出し抜いた目

日本にはウグイの仲間が数種類いるが，そのなかに下顎前端が上顎前端より長く，また上向きという特徴をもつ種類がいることを研究者が発見し，新種ウケクチウグイと名付けたのは1960年代だった。ところが，土地の人たちは18世紀末までにそのことに気付いており，「頬長（ホオナガ）」という独自の名を与えていたのである（➡1800年の項)。

また，琵琶湖・余呉湖・淀川水系にしかいないイワトコナマズ（岩床鯰）という新種が発表されたのは1961年だったが，これも地元では昔から知っていてイワトコナマズ，ホシナマズ，またはゴマナマズと呼んで普通のナマズと区別していた（➡1835年の項)。同じく1961年に新種とされた琵琶湖特産のビワコオオナマズも，漁業者は古くから区別していたという（新日本動物図鑑)。

（２）魚類以外の海産動物

①クジラ・イルカ類

江戸時代には全国各地に捕鯨基地があって，それぞれの土地の漁民には珍しくもなかった。しかし，都会や内陸部の人々は容易に目にすることができなかったから，将軍の上覧に供されたり，見世物にされたりした。年表には，種名不詳のクジラ10件（1725・1734・1766・1770・1783・1794・1798・1820・1832・1851）のほかに，スナメリ（1736・1737・1738）やサカマタ（1820）の記録を挙げたが，クジラの記事は他にも少なくない。

②海獣類

●本年表にはアシカが14件示されている。江戸時代には全国にアシカの群生地があって，各地に残る「アシカ島」「トド島（岩)」（当時はトドとも呼ばれた）の地名がそれを物語る（中村1989)。しかし，その外の地域では珍しかったらしく，江戸･大坂はもとより，『越後名寄』（1748の２件・1754）や対馬藩の記録（1735・1807）には特記されている。

●アシカ以外ではアザラシ（1801・1819・1832・1833・1836・1838）が目立ち，クジラなどと同じく，将軍が上覧したり，都会の見世物にされたりしている。セイウチ（1860）やラッコ（1615，1807）の記録は意外に少ない。

③海亀類

オサガメが10件（1614・1734・1795・1798・1803・1805・1808・1821・1834・1848）と多いが，一目でほかの海亀とは異なるとわかる珍しい亀というので，そのつど記録されたからか。一方，タイマイは３件（870・1743・1806），その他のウミガメ類は計７件（1545・1664・1724・1787・1790・1800・1823）を示したが，これ以外にも多くの記録がある。

④エラブウミヘビ（爬虫類）

２件のみ。うち『薩摩国産物絵図帳・秋冬』（1738）の原記載名は「永良部鰻」で，エラブウミヘビという現和名の由来はこの時代にまで遡るとわかる。一方，文政３年（1820）３月項の原記載名は「ウミクチナワ」だが，この名称はウツボやヨウジウオなどを指すこともあるので，名前だけではそのいずれか決められない。本項では形状の記述によって同定した。

⑤無脊椎動物

●ダイオウイカ：大イカは下記の４件があり，捕獲地はみな関東地方である。日本にはニュウドウイカという別種の大イカも産するが，これは北方産なので，捕獲されたのはみなダイオウイカと考えるのが妥当だろう。なお，天保４年（1833）５月に名古屋で「大烏賊」の見世物があったが，これはコウイカ的な図と長３尺というサイズからコブシメと思われる。

元禄11年（1698）６月27日	房州勝山，長８尺
享保15年（1730）春	相州江ノ島，長９尺
天保11年（1840）10月22日	上総国金谷沖，長２間半
嘉永６年（1853）５月３日	上総国金谷，長１丈７尺

●タコブネ(フネダコ)：タコでありながら殻をもつ本種には古くから関心が寄せられていたが，殻だけなら時に浜辺に打ち上げられるものの，肝心のタコは簡単に手に入る代物ではない。吉宗政権下の産物調査の一環と思われるが，幕府は弘前藩に身付きのタコブネを注文し，享保10年（1725）に望みの品を得ている。

●タカアシガニ：この世界最大のカニは東北地方～九州の太平洋沿岸に広く分布するし，生息数もかなり多かったはずだが，意外にも図示された例は数少なく，見世物にも縁が薄かった。本年表でも３件しかない（1752, 1808, 1826）。うち見世物は第２例の名古屋が唯一の事例で，ほかには年不明の見世物の記録さえ見当たらない。

●カブトガニ：現在では瀬戸内海と九州北部にだけ生息するが，享保元文全国産物調査で漢名の「鱟」か古名の「うんきう」を挙げた国は対馬・紀伊・備前備中・周防・筑前・壱岐であったし，文政10年（1827）には尾張知多郡で捕獲されているから，かつては広範囲に生息していたらしい。ただし，カブトガニの図や詳しい記録は多くない。

●ワレカラ（甲殻類端脚目）：『古今和歌集』『伊勢物語』『枕草子』などに「われから」の名が登場するが，江戸時代になるとその実体が何かわからなくなり，ワレカラと称する図（『佐

州図上』や『千虫譜』＝前者の図の転写）には貝か虫か正体不明の動物が描かれるにいたる。その中で唯一つ真のワレカラを正確に描いたのが，元文３年（1738）項に置いた『紀州分産物絵図』の「われから」図である。

（3）鳥類

①古典に登場して知名度が高かった種類

●ウトウ：陸奥の外ヶ浜に伝わる伝説によると，ウトウ（善知鳥）は穴のなかで子を育て，親が「うとう」と呼ぶと，子が「やすかた」と答えて穴から出てくる。それを猟師が悪用して「うとう」と呼びかけ，子を誘い出して捕えるが，親は悲しみのあまり血の涙を流す。この話をもとにした謡曲「善知鳥」が有名となり，それがどのような鳥かに興味がもたれて，いくつかの記録が残された（1607・1666の２件・1667・1721）。

●ライチョウ:後鳥羽院の和歌「白山の松の木陰にかくろひて，やすらに住めるらいの鳥かな」などが有名になり，深山に棲む雷鳥への関心を高めた。そして，享保19年（1734）には幕府が白山・立山産ライチョウの実写図を求め，延享元年（1744）には飛騨代官が乗鞍嶽の鳥を江戸に送った。天明８年（1788）には加賀侯が白山の個体を水戸相公に贈り，寛政10年（1798）に信濃国諏訪で捕獲，文化元年（1804）にふたたび乗鞍嶽で捕獲。また，嘉永４年（1851）に山本渓愚が立山でライチョウを実見しているし，『遠山奇談』には木曽駒ケ嶽と蓼科山，『信州採薬記』には木曽御嶽にライチョウがいる旨の記事がある。これらの記録を通して江戸時代のライチョウの分布がわかり，現在の分布状況と対比することができる。他に出所不明２件（1830・1839）とエゾライチョウ１件（1823）がある。

●ブッポウソウ（1681・1709・1760・1770・1782・1783）：高野山に深夜「ぶっ・ぽう・そう」＝「仏法僧」と鳴く鳥がいると弘法大師が詩に詠じてから，正体に関心が集まり，その声が聞こえる頃に渡ってくる美しい鳥――体は青緑色で，嘴と足は赤――現在のブッポウソウ（姿の仏法僧）がそれだとされた。しかし，このブッポウソウは「ゲッゲッ，ゲゲゲ」という悪声である。そこで声の正体がさらに探られたが，声の仏法僧がコノハズクと判明したのは昭和10年（1935）のことで，弘法大師の没後ちょうど1100年目であった。

②迷鳥

●ペリカン：本年表には計11件（1430・1654・1681・1716・1725・1731・1744・1815・1820・1826・1862）を収録したが，うち６件が８～10月，１件が夏，１件が秋であり，これらは台風に運ばれてきた可能性が高い。このような事例はほかの種類でも見つかる。明治23年８月10日の写生なので本年表に所収していないが，『両羽禽類図譜』に描かれている最上川で捕獲したシラオネッタイチョウ幼鳥も，おそらく台風に乗ってきたのであろう。

●アネハヅル：ヨーロッパ南東部～アジア東部で繁殖し，日本では稀に迷鳥として記録されるだけだが，目の後から白い房状の羽毛が垂れているなどの特徴があるので，珍重された。本年表では３件だけだが，うち２件は将軍に献上されている。

　　寛文２年（1662）７月９日　　紀伊藩主より幕府に献上

文政４年（1821）６月初旬　尾張国で捕獲し藩に献上，９月将軍家斉に献上
天保７年（1836）３月28日　幕臣毛利梅園が写生

●アホウドリ：年表には下記の５件が記録されている。このほか，栗本丹洲は『信天縁（アホウドリ）海鵞図説』で，「文政初年に江戸の石川島辺で捕えた大鳥もアホウドリだった」旨を記している。江戸時代には八丈鳥島などでおびただしい数が繁殖していたので，本州や九州にしばしば飛来していたのではないかと思われるが，確実な記録は多くない。

文政９年（1826）２月　シーボルト，三保松原で購入
文政11年（1828）２月　石見国浜田で捕獲
天保１年（1830）４月　阿波国津田浦に死鳥が漂着
天保３年（1832）５月６日　江戸小石川馬場に落ちる
嘉永５年（1852）閏２月15日　庄内鶴岡で松森胤保が写生

●その他の迷鳥：エトロフウミスズメ（1852，京都辺？），カンムリツクシガモ（1822，箱館），クロウミツバメ（1807，下北半島），サケイ（1740，仙台：1786年項），ツノメドリ（1809，尾張），ベニバト（1777，肥後），レンカク（1704，駿河：1816，福岡）などが記録されている。一方，オニカッコウ（1679）や，幕末でのカンムリツクシガモの３件（1860・1861・1868）は迷鳥か，海外から持ち込まれたものか不明。

③その他の希少種・珍鳥

●当時も今も数少なかったと思われるのは，エトピリカ（1793・1816），シマゴマ（1682），シマノジコ（1867），シラガホオジロ（1795），ソデグロヅル（1667・1864），ツリスガラ（1852），ツルクイナ（1780），ヤイロチョウ（1691），ヤツガシラ（1671）など。もっとも，ヤイロチョウは輸入品の可能性もある。

●希少種ではないが，江戸時代の人々に珍しかったと思われる種類は，アカヒゲ（1737），アマサギ（1737），アマツバメ（1710），アリスイ（1673），イワヒバリ（1665），カワガラス（1737），キバシリ（1677），ギンザンマシコ（1825），ケイマフリ（1808），コクガン（1752），ツクシガモ（1673），ヨタカ（1676・1736・1737・1866）など。

④往時はかなりの数がいたと思われるが，現在は希少あるいは絶滅した種類

●シマフクロウ：元禄元年（1688）と享保14年（1729）の２件があるが，ともに松前藩主の贈呈品・献上品。かつては蝦夷地にかなり生息していたようだが，現在では絶滅に瀕している。シロフクロウは寛政７年（1795）の１件だけで，これは摂津で捕えられた迷鳥。なお，江戸時代の著作では，シマフクロウとシロフクロウを混同，あるいは同一種と誤解している場合が少なくないので，注意を要する。

●ヘラサギ：享保６年（1721）に江戸上野の不忍池で数羽が見られており，江戸での鷹狩（1729・1764・1766）でも得られている。

●クロトキ：明和元年～寛政７年（1764～95）に計11回江戸の鷹狩で得られているほか，慶応元年（1865）の江戸でも見られている。

●ノガン：現在は迷鳥あるいは稀な冬鳥とされるが，元禄10年（1697）刊の『本朝食鑑』に「肥

州・筑州にもっとも多く」，文化２年（1805）刊の『本草綱目啓蒙』に「曠野ニ群飛シテ列ヲナス……江州（近江）ニモアリ」と記されているように，江戸時代には特定の地方にある程度の数が飛来していたらしい。年表には３件の記録（1669・1774・1844）がある。

●コウノトリ：年表には江戸の事例４件（1811・1834・1864・1865）を挙げたが，幕末期の江戸では浅草寺・東本願寺（浅草）・西福寺（蔵前）・五百羅漢（本所）・新長谷寺（麻布）などに巣があって，珍しい鳥ではなかった。しかし，明治10年代に激減し，同20年（1887）頃に東京から姿を消したという（磯野・内田1989）。ついに現在では，日本で繁殖する個体は絶滅し，少数が時々渡来するだけになった。

●トキ：江戸時代には広く分布し，美しい羽根を矢羽にする目的などで他地域から導入した加賀（1639），広島（1724），徳島（1768）の事例もある。一方では，増え過ぎて水田を荒らすため銃猟を許した場合（1669・1817）も知られている。享保元文全国産物調査でトキを記載したのは，陸奥・出羽・常陸・下野・越中・能登・加賀・出雲・隠岐・対馬・近江・播磨・備中・周防などで，蝦夷地にも少なくなかったことが『松前志』や幕末の採集記録（1861）からわかる。京都にも生息していたと『松前志』『本草綱目会識』『本草品目』『本草薬名備考和訓鈔』などに記されているし，江戸では多くはなかったが，鷹狩で捕えた事例（1719・1743・1782・1789・1800）や，自宅の庭に飛来した場合（1837）があり，名所案内（1834）にも登場する。しかし，明治維新以後各地とも激減し，すでに日本の野生個体は絶滅した。

⑤無人島（現小笠原諸島）の鳥とコウモリ

延宝３年（1675）項に示したように，幕府はこの年無人島に探険隊を派遣，その報告書など（➡同項出典）によれば，ハシブトゴイ（固有亜種），セイケイ類の一種，アカガシラカラスバト（固有亜種），オガサワラカラスバト（固有種），オガサワラマシコ（固有種），メグロ（固有種），オガサワラオオコウモリ（固有種）が生息していたことは確実である。このうち，セイケイ類の一種（セイケイか，その近縁種と思われる）は，その後ヨーロッパの研究者が到着する以前に姿を消してしまったらしく，したがって標本はもちろん，スケッチも残されていない。また，ハシブトゴイ，オガサワラカラスバト，オガサワラマシコ，それに幕府探険隊が気付かなかったオガサワラガビチョウ（固有種）はヨーロッパの研究者が採集して標本は残ったが，20世紀初頭頃までに絶滅してしまった（鈴木2002・2003・2004）。残るアカガシラカラスバトとオガサワラオオコウモリも，絶滅の恐れが多分にある。なお，南西諸島に棲む別種クビワオオコウモリは，江戸時代初期から知られていた（1642・1815）。

（４）その他の動物

①哺乳類

●ハクビシン：いま各地で野生化が問題になっているが，その由来には２説ある。第一は毛皮用に海外から輸入・飼育していた個体が脱出または放棄され，それが増えたとの説，第二は元来日本に生息していたとの土着説である。江戸時代の記録では，明和２年（1765）に捕獲された「雷獣」と，天保13年（1842）に周防国に現われた奇獣が，それぞれの図からハクビ

シンではないかといわれ，土着説の証拠とされる。

●ツシマヤマネコ:「虎」と称する見世物２件（1826･1851）は，ツシマヤマネコらしい。なお，文政10年（1827）12月に対馬経由で朝鮮から長崎に持ち込まれたヒョウの子２頭も，初めは「虎」と称していた。本物のトラの初渡来は，開国後の文久元年（1861）である。また，渡来したジャコウネコを山猫と呼んだ場合もある（磯野1993)。

●ジャコウネズミ：明暦２年（1656）にジャガタラから長崎に侵入したとされるが，同じ頃に琉球から鹿児島にも入ったらしい。のち，天保10年（1839）に京都でジャコウネズミかと思われる記述が残るが，断定はできない。現在の分布は南西諸島・長崎・鹿児島に限られる。

②爬虫類・両生類

●イリエワニ：延享元年（1744）10月に薩摩国硫黄島で長７尺程のワニ，寛政12年（1800）２月に奄美大島で「面ノ長サ三尺」のワニが，ともに生きて捕獲された記録があり，いずれもイリエワニではないかといわれる（高島1955)。この種は東南アジアや中国南部の海岸・入江に生息するが，しばしば外洋に出ることがあり，それが流されて薩南諸島に漂着した可能性が高い。薩摩藩士で嘉永３年～安政２年（1850～55）のあいだ奄美大島に遠島にされていた名越（なごや）左源太が記した奄美の民俗誌『南島雑話』前編にも，「住用（すみよう）の内海にて先年取る処の蛇龍」としてワニの図が描かれている。

●ハブ：沖縄諸島のほか，奄美諸島にも分布するので，享保元文全国産物調査の『薩摩国産物絵図帳』(1737）に「はぶ」の名で図がある。おそらく我が国でもっとも古いハブ図で，栗本丹洲の『千虫譜』にも転写されている。

●オオサンショウウオ：下記のように推古27年（619）の２件を始め，年表に計14件も登場するのは，世界最大の両生類の上，グロテスクな姿が人目につきやすい，丈夫である，見世物にも格好の品だったなどの理由からだろう。現在は岐阜県以西にだけ生息するが，過去には江戸での記録が牛込高田川，同板橋水車堰下，江戸城竜ノ口堀と３件あり，江戸の見世物２件も近辺の産の可能性が高いので，往時には関東にも分布していたのではないか。

推古27年（619）	４月４日	近江国蒲生川
推古27年（619）	７月	摂津国の堀江
延暦16年（797）	８月16日	平安京の宮殿の側溝，長１尺６寸
仁寿２年（852）	３月７日	近江国産
天和年間（1681～83）		武州の牛込高田川，長３尺
享和１年（1801）	６月12日	江戸板橋水車の堰下，長４尺１寸
文政２年（1819）	10月15日	尾張国の御伊勢川，長２尺７寸
文政９年（1826）	２月19日	鈴鹿山中産
文政11年（1828）	６月10日	名古屋柳薬師で見世物
天保３年（1832）	８月20日	京都二条城の堀，長３尺５寸
天保４年（1833）	11月	名古屋大須で見世物，長さ３尺５～６寸
天保12年（1841）	春	江戸城竜ノ口堀，長３尺

嘉永６年（1853）５月　　江戸で生品を見世物とする

慶応１年（1865）１月18日　　江戸浅草奥山で見世物，長４尺余

③ホウネンエビ

「エビ」の名はつくが，普通のエビとは別のグループ（甲殻類無甲目）に属する。初夏の水田に出現し，大発生すると豊年だとの言い伝えが現和名の由来である。年表には，天保２年（1831）項と文久２年（1862）項の２件がある。前者には「正式の名称は無いので，仮にエビムシと名付けるが，民間ではメデタムシともいう」旨の注記があり，詳しい観察記録と良いスケッチが残されている。一方，後者の図には「豊年魚」の名が添えられているが，これが文久２年の頃の通称かどうかわからない。この図を所収する『博物館虫譜』は明治初期の博物局が編集した資料なので，整理の際に新たに名を添えたのかもしれないからである。なお，ホウネンエビと同じように夏の水田に発生する小さな甲殻類に，カブトエビがある。その図も長いあいだ探しているが，こちらはまだ見付かっていない。

文　献　一　覧

書名の五十音順。ただし，「姓＋西暦」形式で表示した報文は書名一覧の次に置き，著者名の五十音順に配列した。➡は，正式書名あるいは参考文献を示す。

阿淡産志，小原春造ほか，57巻，明治５年成，東京国立博物館，和2215。➡阿淡産志の研究，福島義一，徳島県出版文化協会，1990年。

姉羽鶴之図，猿猴庵（高力種信），国会図書館，特7-692：自筆本。

信天緑海鵞（アホウドリ）図説，栗本丹洲，国会図書館，特7-42。

異魚図纂，栗本丹洲。➡異魚図纂・勢海百鱗，奥倉魚仙編，国会図書館，別11-30。

異魚図賛，栗本丹洲，国会図書館，亥二21。

筠庭（いんてい）雑録，喜多村信節，日本随筆大成，二期７，吉川弘文館，1974年。

越後名寄，丸山元純，31巻，宝暦６年自序：翻刻，越佐叢書15・16，野島出版，1978・1980年。

江戸参府紀行，Ｐ・Ｆ・シーボルト，『NIPPON』第２章の訳，平凡社東洋文庫，1967年。

猿猴庵文化日記，高力種信，日本庶民生活史料集成，９，三一書房，1961年。

猿猴庵文政日記，高力種信，日本都市生活史料集成，４，学習研究社，1976年。

大泉諸鳥写真画譜，松森胤保，慶応２年自序。➡磯野・内田（1990）

小笠原島記事，33冊，国会図書館，W243-9。

海獣考，千葉直胤，天保９年成，東京大学総合図書館，T86-130。

海鰌談，木村 厚，寛政10年刊：影印本，江戸科学古典叢書，44，恒和出版，1982年。

改正甘露叢，内閣文庫所蔵史籍叢刊，47・48，汲古書院，1985年。

蟹譜（かいふ），栗本丹洲，国会図書館，わ485-1，123-30：他館にも転写本がある。

快風船渉海紀事，水戸彰考館蔵。

甲子夜話，松浦静山，正編100巻・続編100巻・三編78巻：翻刻，平凡社東洋文庫，1977～1983

年。
金杉日記，山崎美成：翻刻，続燕石十種，３，中央公論社，1980年。
ガラン鳥図，清水淇川画，国会図書館，特7-693。
寛政重修諸家譜，堀田正敦等撰，文化９年成：翻刻，続群書類従完成会，1964〜66年：該当するのは第３巻所収の松前家
観文介譜，堀田正敦，東洋文庫，三Jaろ-64：小野蘭山転写本。
観文禽譜，堀田正敦，寛政６年序：東京国立博物館，国会図書館などに転写本がある。
看聞御記，後崇光院伏見宮貞成親王，続群書類従，補遺２，続群書類従完成会，1958年：日記。
奇魚類，武蔵石寿，内閣文庫，197-296：自筆本。
奇鳥生写図，河野通明ほか，文化11年成，国会図書館，別10-38。
紀南六郡志，畔田翠山，８冊，東京国立博物館，和813。
奇品図会，栗本丹洲，国会図書館，192-132。
笈埃随筆，百井塘雨，日本随筆大成，二期12，吉川弘文館，1974年。
九淵遺珠，丹羽正伯，杏雨書屋，杏1833：岩瀬文庫本もほぼ同一内容。
享保元文諸国産物帳集成，盛永俊太郎・安田 健編，影印本19巻，科学書院，1985〜95年。
安芸国産物絵図（芸藩土産図の後半部），同上第８巻に所収（以下同じ）
尼崎図上（ずあげ），第５巻
和泉図上，第５巻
出雲国産物名疏，第７巻
越中国産物之内絵形，第１巻
大隅国産物絵図帳，第14巻
隠岐国産物絵図注書，第７巻
紀州勢州産物図（略称）➡紀州勢州産物之内相残候絵図，第６巻
紀州分産物絵図，第６巻
薩摩国産物絵図帳，第14巻
筑前国産物絵図帳，第12巻
長門国産物之内絵形，第８巻：長門産物之内江戸被差登候地下図正控（第10巻）も参照した。
備前国備中国産物絵図帳，第７巻
日向国産物絵図帳，第14巻
盛岡領産物絵図帳（略称）➡［盛岡領］御書上産物之内御不審物図，第15巻
享保世話，編者未詳，続日本随筆大成，別巻５，吉川弘文館，1982年。
魚鳥写生図，著者未詳，国会図書館，特1-3269。
魚譜，栗本丹洲，国会図書館，別10-3：自筆本，サメ類。同題別本がある。
錦窠蟹譜（きんかかいふ），伊藤圭介編，５冊，国会図書館，別11-7。
錦窠魚譜，伊藤圭介編，32冊，国会図書館，別11-11。
錦窠禽譜，伊藤圭介編，23冊，国会図書館，別11-10。

禽鏡，著作堂主人（滝沢馬琴）編，天保５年序，６軸，東洋文庫，五Ｆ２：原本。
熊野物産初志，畔田翠山，５巻，嘉永１年頃成：翻刻，紀南文化財研究会，1980年。
栗本写生図（略称）➡栗本丹洲鳥獣魚写生図，栗本丹洲，５軸，国会図書館，別7-569。
月堂見聞集，本島知辰：翻刻，続日本随筆大成，別巻３，吉川弘文館，1982年。
兼葭堂雑録，木村兼葭堂著・暁 鐘成撰，安政６年刊：翻刻，日本随筆大成，一期14，吉川弘文館，1975年。
巷街贅説，塵哉翁，文政12年序：翻刻，続日本随筆大成，別巻９・10，吉川弘文館，1983年。
皇代系譜，毛利元苗・毛利元寿（梅園），12冊，内閣文庫，141-44。
古今要覧稿，屋代弘賢編，原書房，1982年。
小判魚，筆者未詳，東京国立博物館，和4022。
査魚志，原 南陽，内閣文庫，197-153。
佐州図上（ずあげ），藤沢長達，享保15年序，国会図書館，W391-9：『佐抄図』『佐渡州物産』『佐渡物産志』などの異題をもつ資料もある。本書は『享保元文諸国産物帳』の一つとして扱われることもあるが，記載形式からそれとは無関係と思える。
三州山海異品，阪 尚教，国会図書館，特1-3050。
三代実録，新訂増補国史大系，吉川弘文館，1934年。
紫藤園海鯊図，畔田翠山，杏雨書屋，貴171：サメ類。
島津家動物写生図，編者未詳，山階鳥類研究所蔵。
写生物類品図，編者未詳，国会図書館，別10-43。：同題別本があるので注意。
承寛襍録（諸留書），10冊，内閣文庫，150-122。
諸家随筆集，高力種信編。➡鼠璞十種，三田村鳶魚編，上巻，中央公論社，1978年。
諸国里人談，菊岡沾凉，寛保３年刊：翻刻，日本随筆大成，二期24，吉川弘文館，1975年。
庶物類纂，稲生若水・丹羽正伯編著：影印本，科学書院，1987～89年。
信州採薬記（略称）➡天保七丙申年七月廿七日ヨリ御薬園採薬為御用罷越之記，大窪昌章：翻刻，濃州信州採薬記，随筆百花苑，４，中央公論社，1981年。
信天縁海鵞図説➡アホウドリ……
新日本動物図鑑，岡田 要ほか，北隆館，1965年。
震雷記，後藤梨春，明和４年刊，国会図書館，特1-3436。
随意雑識，岩永文禎，杏雨書屋，研1898。
随観写真，後藤梨春，1757年序：20巻完本は東京国立博物館のみ，魚部・介部は転写本多し。
図録・日本博物学事始，サントリー美術館，1987年。
摂陽奇観，浜松歌国輯：翻刻，浪速叢書，１～６，名著出版，1977～78年。
浅草寺日記，第１巻，浅草寺：翻刻，金龍山浅草寺，1978年。
草花魚貝虫類写生図，狩野常信，29巻，東京国立博物館，A4555。→磯野2004
泰平年表，大野広城編，天保12年刊：翻刻，続群書類従完成会，1979年。
泰平年表続編・第一，続群書類従完成会，1982年。

耽奇漫録，山崎美成編，日本随筆大成，一期別巻上・下，吉川弘文館，1993・94年。
探幽縮図，狩野探幽，同朋舎出版，1981年：ソデグロヅルは「鷹絵巻」に所収。
朝暾抄，貴志忠美，岩瀬文庫，109-66。
鳥類図譜，神谷栄秋・神谷栄寿画，国会図書館，YR2-28：熊本侯蔵図の転写。
通航一覧附録，林 復斎ら，安政３年頃成：翻刻，泰山社，1940年。
天保雑記，藤川整斎，内閣文庫所蔵史籍叢刊，32〜34，汲古書院，1983年。
東夷物産志稿，谷元旦？，国会図書館，特1-2990：影印本，近世歴史資料集成Ⅱ期－６，科学書院，1994年。
当代記，著者未詳：翻刻，史籍雑纂，２，国書刊行会，1911年。
桃洞遺筆，小原桃洞，６冊，天保４年・嘉永３年刊：影印本，江戸科学古典叢書，28，恒和出版，1980年。
東遊日記，松岡玄達，赭鞭叢書，上巻，内閣文庫，特96-1。
遠山奇談，華誘居士，寛政10年・享和元年刊：翻刻，日本庶民生活史料集成，16，三一書房，1970年。
トキの文献（１〜10），安田 健，応用鳥学集報，３〜９巻，1983〜89年。
徳川実紀，林述斎監修・成島司直ら編：翻刻，新訂増補国史大系，吉川弘文館，1929〜36年。
鳥写生図巻，狩野常信，８巻，東京国立博物館，A4554。➡磯野2003Ａ
長崎年暦両面鏡➡［新編増補］長崎年暦両面観，打橋竹雲原著，長崎県立長崎図書館。
難波噺，池田正樹，随筆百花苑，14，中央公論社，1981年。
南島雑話，名越左源太，安政２年頃成？：翻刻，平凡社東洋文庫，1984年。
南風(なんぷう)戇(とう)図説，栗本丹洲。➡『視聴草』（内閣文庫所蔵史籍叢刊－特刊第二），第10巻，汲古書院，1985年：続三集３に所収。「図説」の題だが，図は無い。
南楼随筆，小野蘭山，東洋文庫，三Jaろ－25：自筆本。➡磯野2003Ｂ
日東魚譜（元文６年序本），神田玄泉，国会図書館，特7-197：序の年が異なる４種類があり，それぞれ構成と内容が多少異なる。
日本紀略，編者未詳：翻刻，新訂増補国史大系，吉川弘文館，1929年。
日本書紀，舎人親王ら編：翻刻，新訂増補国史大系，吉川弘文館，1951・52年。
日本博物学年表（改訂増補版），白井光太郎，大岡山書店，1934年。
日本薬園史の研究（改訂増補版），上田三平著・三浦三郎編，渡辺書店，1972年。
入越日記，山本渓愚，山本読書室蔵：正橋1999より引用
梅園魚譜１・２➡梅園魚品図正，毛利梅園，国会図書館，別4222：本来は次項と併せて３巻。
梅園魚譜３➡梅園魚譜，毛利梅園，国会図書館，別4223。
梅園禽譜，毛利梅園，国会図書館，別4224。
博物舘魚譜，17冊，東京国立博物館，和863：明治前半に博物局が編集，下３点も同じ。
博物舘禽譜，３冊，東京国立博物館，和957。
博物舘獣譜，２冊，東京国立博物館，和956。

博物舘虫譜，２冊，東京国立博物館，和959：爬虫類・両生類・甲殻類。
博物図，著者未詳，20冊，内閣文庫，196-174。
幕末小笠原島日記，菊池作次郎，緑地社，1983年。
半日閑話，大田南畝：翻刻，日本随筆大成，一期８，吉川弘文館，1975年。
常陸物産志，木内政章：『錦窠魚譜』冊13より引用。
百鳥譜残欠，栗本丹洲，国会図書館，特1-3125：自筆本。
百品考，山本亡羊，天保９年・嘉永１年・嘉永６年刊：影印本，科学書院，1983年。
備陽記，石丸定良，享保６年序：影印本，日本文教出版，1965年。
弘賢（ひろかた）随筆，屋代弘賢，60冊，内閣文庫，特95-4。
弘前市史・藩政編，弘前市史編集委員会，弘前市，1963年。
武江年表（増訂版），斎藤月岑：翻刻，平凡社東洋文庫，1968年。
藤岡屋日記，藤岡屋由蔵：翻刻，三一書房，1987～95年
物産宝庫，田中芳男編，32冊，東京大学総合図書館，Ａ00-5765：甲乙の２部から成る。
文会録，戸田旭山編，宝暦10年刊：影印本，江戸科学古典叢書，45，恒和出版，1982年。
文徳実録，新訂増補国史大系，吉川弘文館，1934年。
編修地誌備用典籍解題，文政６年序，17冊，国会図書館，124-235。
北条五代記，三浦浄心，寛永18年刊：翻刻，［新訂増補］史籍集覧，６，臨川書店，1967年。
豊文禽譜，水谷豊文，国会図書館，特7-658：自筆本，水谷禽譜とは別資料。
宝暦現来集，山田桂翁，天保２年自序：翻刻，続日本随筆大成，別巻６・７，吉川弘文館，1982年。
北越物産写真，亀井協従，寛政12年６月跋，国会図書館，W373-35：自筆本，同年夏に北越を巡回して作成。『越後国産真図』『後越物産生写』も同本である。➡本間・蒲原（1999）
堀田禽譜➡禽譜，堀田正敦，東京国立博物館，和954・和955・和962。
翻車考，栗本丹洲，文政８年成，国会図書館，別11-29：「翻車」はマンボウ。
本草綱目会識，小野蘭山述・寺尾隆純筆記，東京国立博物館，和168。
本草綱目啓蒙（重修版），小野蘭山著・梯（かけはし）南洋増訂，弘化１年刊。
本草綱目啓蒙（重訂版），小野蘭山著・井口望之訂，弘化４年刊：翻刻，平凡社東洋文庫，1991～92年。
本草綱目纂疏，曽 占春，13巻＋附録，内閣文庫，196-59。
本草写生図譜，山本渓愚，９冊，雄渾社，1981年：影印本。
本草図説，高木春山，195冊，岩瀬文庫，45-11：自筆本。
本草品目，西沢保吉・阿那辺有恒，天明元年成，岩瀬文庫，1-102。
本草薬名備考和訓鈔，丹波頼理，文化４年刊，国会図書館，105-62。
本朝食鑑，人見必大，元禄10年刊：現代語訳，平凡社東洋文庫，1976～81年。
本朝諸国風土記，僧敬順（十方庵），14巻，寛政12年序，国会図書館，235-113。
松前志，松前広長，天明１年序：翻刻，北方未公開古文書集成，１，叢文社，1979年。

松前年々記，松前広保・松前広時・高橋盛明編：翻刻，松前町史・資料編１，松前町，1974年。
水谷氏禽譜，水谷豊文，国会図書館，寅－12：転写本。
見世物研究，朝倉無声，思文閣出版，復刻版，1977年：元版，1928年。
見世物雑志，小寺玉晃，文政11年序：翻刻，三一書房，1991年。
みやびのしをり，きぎすのや則房，天保５年刊，国会図書館，特1-3144。
名陽見聞図会，小田切春江（歌月庵喜笑），天保４年序，１～６・８編：翻刻，美術文化史研究会，1987年。
盛岡藩雑書（盛岡藩家老日記）：翻刻，盛岡市教育委員会・盛岡市中央公民館編，熊谷印刷出版部，1986年～。
山猫図説，桂川国寧，文政９年成➡今泉源吉，『桂川家の人々』，続巻，篠崎書林，1968年。
遊覧記，松森胤保：後半は幕末期の江戸の鳥屋や野鳥の記録に富む。➡磯野・内田（1989）
楽只亭品物図彙，大坂屋四郎兵衛，杏雨書屋，研3705：自筆本。
蘭畹摘芳（原本），大槻玄沢編著，四編39巻，東京国立博物館，和114。
栗氏魚譜Ａ，栗本丹洲，22軸，杏雨書屋，洗４－１～22：自筆本
栗氏魚譜Ｂ，栗本丹洲，10冊15巻，国会図書館，別11-31：転写本，表中の数字は巻番号。
栗氏魚譜Ｃ，栗本丹洲，12冊12巻，国文学史料館資料館，祭魚洞文庫本：転写本
『栗氏魚譜』は各本ごとに巻構成と内容が異なる。原本の形状については，『錦窠魚譜』冊29にある伊藤篤太郎の以下の記述が参考になる。
「伊藤篤太郎按……家蔵栗本氏魚譜［上記Ｂ］，凡二十巻アリ。コノ魚譜ハ栗本鋤雲翁ヨリ借用シテ影写セルモノナリ。余ハ少年ノ頃，鋤雲翁ノ東京本所ノ邸ヘ時々此魚譜ノ原本ヲ借リ換ヘニ行キシコトアリ……原本ハ何レモ巻物ニテアリシ」
竜絵巻物，栗本丹洲，国立科学博物館：自筆本。
両羽禽類図譜，松森胤保，明治16年序，14冊，光丘文庫蔵『両羽博物図譜』に所収。➡磯野1989，磯野・内田（1991）
両羽爬虫図譜，松森胤保，１冊，光丘文庫蔵『両羽博物図譜』に所収。➡磯野1989

＊　＊　＊　＊

磯野直秀（1989），『両羽博物図譜』の研究２（成立までの経緯と各部の概要），慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，６号。
磯野直秀（1993），明治前鳥獣渡来年表，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，13号。
磯野直秀（1997），日本博物学史覚え書５，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，22号。
磯野直秀（2002），日本博物学史覚え書12，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，31号。
磯野直秀（2003Ａ），博物誌資料としての『鳥写生図巻』，MUSEUM，584号。
磯野直秀（2003Ｂ），小野蘭山の随筆，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，34号。
磯野直秀（2004），博物誌資料としての『草花魚貝虫類写生図』，MUSEUM，590号。
磯野直秀・内田康夫（1989），『遊覧記』に見られる江戸の鳥類，慶應義塾大学日吉紀要・自然

科学，７号：該当部分の主要記事を翻刻してある。
磯野直秀･内田康夫（1990），『両羽博物図譜』の研究４（『銃猟誌』から『両羽禽類図譜』へ），慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，８号。
磯野直秀・内田康夫（1991），『両羽博物図譜』の研究５・６（『両羽禽類図譜』），慶應義塾大学日吉紀要・自然科学，９号・10号。
小松勝助（1991），対州産物覚帳の解説，『享保元文諸国産物帳』第11巻，科学書院。
佐藤次男（1978），徳川光圀と快風丸の蝦夷地探検について，水戸史学，８号。
鈴木惟司（2002・2003・2004），覚え書き：江戸時代初期小笠原で日本人船乗りたちが出会った鳥，東京都立大学小笠原研究年報，25号・26号・27号。
高島春雄（1955），日本のワニ，山階鳥類研究所研究報告，１巻７号。
中村一恵（1989），ニホンアシカ：その分布と絶滅をめぐって，日本の生物，３巻12号。
南部久男（2000），富山県で絶滅した大型動物の記録４，富山市科学文化センター研究報告，23号。
本間義治（1989），古記録からみた頬長（ホオナガ）（未記載種ウケクチウグイ）の分布，新潟県生物教育研究会誌，24号。
本間義治（1991），耽奇（たんき）漫録に載せられた海獣（鰭脚類）の図，鯨研通信，381号。
本間義治・蒲原 宏（1999），『越後国産真図』に載せられた動物，新潟県生物教育研究会誌，34号。
正橋剛二（1999），近世後期における本草学史上の立山について，富山県立山博物館調査研究報告書，富山県立山博物館。
安田 健（1987），『江戸諸国産物帳』，晶文社。
谷津直秀（1940），隠れた博物学者亀（き）協従，植物及動物，８巻，1207～1209頁。

謝　　辞

本研究に際して，長谷川 充氏から快風丸および『松前年々記』関係の資料を提供していただきました。この場を借りて，厚く御礼を申しあげます。